

仲原正治 のまちある記

「歴史と趣味でまち歩き」（最終回）



左：原爆ドームの前の筆者

右：「幸福公社」の看板。みなさまが幸福でありますように。

目次：文化資本を豊かに活用ー金沢市	2 P～
世界遺産にふさわしいかー鎌倉市	13 P～
8月6日 平和を祈るー広島市	24 P～
観光と自然災害を考えるー箱根町	34 P～
赤煉瓦の運命と魅力ー半田、舞鶴、奈良、横浜、日南	44 P～
「中心市街地&被災地」で見えてくるもの	55 P～

1) 「文化資本を豊かに活用」—金沢市

金沢といえば、加賀前田家百万石の城下町、昔ながらの町並みだけではなく、金沢 21 世紀美術館をはじめとする現代アートや伝統文化、食文化など都市ブランド力（イメージ）は常に高く、県外の 90% 以上の人々が「良いイメージ」を抱いている。北陸新幹線が 3 月 14 日、金沢まで延伸し、東京から約 4 時間かかっていた鉄道の旅も 2 時間半に短縮された。今回は、新幹線開通直前の金沢を旅し、数多くの金沢の魅力に触れてみた。



江戸以降、何回か火災にあった金沢城は復元工事を進め、現在は金沢城址として国の史跡に指定されている。
撮影：2015 年 2 月 25 日



洋風と和風が混ざったデザインが特徴的な尾山神社は 1873 年（明治 6 年）創建。加賀藩の藩祖前田利家を祭る。
撮影：2015 年 2 月 25 日



金沢陸軍兵器支廠として使われていた赤レンガ倉庫は「石川県立歴史博物館」として活用されている。現在工事中で 2015 年 4 月 17 日リニューアルオープン。
撮影：2015 年 2 月 25 日

戦災を受けなかった金沢

1488 年、加賀地方で起きた一向一揆で、加賀の国はその後約 100 年にわたり一向宗門徒（浄土真宗）の支配となった。当時の武家社会の中で、民衆を中心とした組織が一国を司るという大事件だった。1546 年には現在の金沢城址の場所に金沢御堂（尾山御堂）という寺院ができ、一向宗の拠点となり、その周辺に街が形成された。1580 年に織田信長が加賀に侵攻、柴田勝家の甥である佐久間盛政が金沢御堂を攻略、一向一揆は終焉し、そこを尾山城とした。その後、勝家は後継者争いで秀吉と戦い、勝家側の前田利家が秀吉側に代わり、尾山城を攻略、その功により前田家は尾山城に入り、以後 280 年にわたり金沢の地を支配してきた。金沢は江戸、明治、大正、昭和、平成に至る約 400 年間、大規模な災害や戦災を受けることなく脈々と歴史や文化、伝統を継承してきている。

金沢が神社仏閣や町並みなどの歴史的な香りを色濃く残している一因は、戦災を免れたことだろう。なぜ、金沢は空爆を受けなかったのだろうか。米軍は軍事施設や工場のある場所などをリストアップし、空爆都市の優先順位をつけたが、金沢は優先順位が低かったという説がある。しかし、金沢には 1898 年に陸軍第 9 師団が編成され、金沢城内に司令部庁舎もあったし、兼六園近くの赤レンガ倉庫は金沢陸軍兵器支廠として使われ、日本海側の軍事拠点の一つだった。日本海側の都市で米軍機がたどり着くまでに時間がかかるからという説もあるが、富山や新潟が空爆された事実を考えると、その説は採用しにくい。ロマンを感じさせるのは、歴史と伝統を持つ文化的な都市であったので破壊するのが忍びなかったという説。京都や奈良、鎌倉も空襲が少なかったため、歴史的な文化財がある町は、文化財の消失を嫌ったアメリカが空爆を控えたのではという説だ。こうした説があるが、偶然か人為的かはわからないが、20 万人規模の都市が空爆を受けなかったことは事実で、これが現

仲原正治

の

まちある記

在の金沢の魅力のベースを作っている町並みを残したことは間違いない。

金沢には江戸時代の町並みだけではなく、近代建築である軍関係施設も多い。明治末期から大正、昭和初期に作られたものだが、多くの建物が保存活用されていることから、金沢市や石川県の歴史を大切にしまちづくりの姿勢が伺える。

重要伝統的建造物群保存地区とまちづくり

金沢市がほかの都市と比べて伝統的建造物群保存地区（伝建地区）の指定が遅かったことは、まちづくりの不思議のひとつだ。伝建地区制度は1976年に始まっているが、金沢市は制度発足から25年後の2001年（平成13年）に東山ひがし地区がはじめて選定されている。その後、08年に主計（かずえ）町、11年に卯辰山麓、12年に寺町台が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、市内に4か所となった。文部科学省によると、2014年12月10日現在で、89市町村109地区（合計面積約3,770ha）、約26,400件の伝統的建造物及び環境物件が特定され保護されている。



木虫籠（きむこー出格子）と「べんがら」（朱色）が美しい「ひがし茶屋街」の通り。
撮影：2015年2月26日



卯辰山山麓には多くの寺社があるが、道路は狭く、自動車がすれ違えない場所が多い。
撮影：2015年2月25日



寺町という名前のとおり、多くの寺がある
撮影：2015年2月25日

右：卯辰山麓、ひがし茶屋街近辺の案内図。卯辰山麓地区には多くの寺社が残っている
撮影：2015年2月25日



金沢の伝建地区選定は遅れたが、歴史的町並みを残す取り組みは、それ以前の64年に景観政策として「武家屋敷群地区の土塀・門などの修復制度」から始まっている。68年には「近代的都市に調和した新たな伝統環境を形成して、後代の市民に継承すること」を目的に「伝統環境保存条例」が制定され、伝統環境保存区域の指定や委員会設置を行っている。国の伝建地区制度の発足を受け、77年に「金沢市伝統

仲原正治

の

まちある記

的建造物群保存地区保保存条例」を制定し、地区における保存計画の策定、現状変更行為の制限などを盛り込んでいる。



目の前を浅野川が流れる主計町(かずえまち)の町並み。
撮影：2015年2月26日



にし茶屋街も主計町やひがしと同じように舗装が統一されている。
撮影：2015年2月25日



にしの検番事務所は洋風建築で、内から三味線の音が聞こえた。
撮影：2015年2月25日



特別名勝兼六園の金沢名物の雪吊り。今年は雪が少なかったと聞いた。
撮影：2015年2月25日

この条例に基づき、「東山ひがし茶屋街」の伝建地区選定に向けた調査等が始まった。89年に茶屋建築の特徴である木虫籠(きむこー出格子)の修繕をはじめ、外観の修復や新築の修景事業などの補助制度をつくり、保存を進めてきた。

東山ひがし茶屋街は浅野川の東側に文政3年(1820)に茶屋と呼ばれる遊郭を整備したのが始まりで、歓楽街として栄え、経済・文化人の社交場としても活用された。犀川西側には、「にし」と呼ぶ茶屋町があり、ここも同時期にできていて、現在でも芸妓の手配をする検番事務所がある。

主計町(かずえまち)は、明治時代になってからできた茶屋街で、明治中頃には、「ひがし」、「にし」とともに三大茶屋街として栄えた。今でも三つの茶屋街には茶屋があり、芸妓を呼んで遊ぶことができる。

94年には「こまちなみ保存条例」を制定し、「面的な広がりを持たないが歴史的な価値を有する武家屋敷、町屋、寺院、その他の建造物またはこれらの様式を継承した建造物が集積し歴史的な特徴を残すまちなみ」を「こまちなみ保存地区」として指定している。95年から2002年までに10地区約35.5haが指定されていたが、旧観音町地域は、区域全域が卯辰山麓伝建地区に選定されたため解除となり、現在は9地区となっている。現在、金沢市では、景観修復事業やまちなみ修景事業など約70にのぼる補助金・助成金制度を設けており、建物を修復保存してきた市民と行政が協働で50年以上続けてきた賜物が、今の金沢の魅力の一つである町並みを作っている。

近代建築の保存活用と芸術活動育成

金沢市は新しい魅力創出のための事業も進めてきた。それは金沢文化と言われる伝統的なものと、最先端的な文化との融合とも言えるのではないだろうか。

金沢に来たらほとんどの人が訪れる兼六園は水戸の偕楽園、岡山の後樂園と並ぶ日本三名園の一つで、国の特別名勝に指定されている。兼六園は1676年加賀5代目藩主前田綱紀(つなのり)が別荘を建て、その周辺を庭園にしたのが始まりと言われている。当初は「蓮池庭」と呼ばれていたが、12代藩主斉広(なりなが)の時代に「兼六園」と命名されている。現在のような一大庭園になったのは1851年で、74年(明治7年)からは市民に開放され、1922年(大正11年)国の名勝に指定され、85年には特別名勝として国宝級の格付けになった。

仲原正治

の

まちある記



旧制第四高等学校は「石川四高記念文化交流館」として保存活用されている。
撮影：2015年2月26日



旧大和紡績の工場を活用した金沢市民芸術村。工房のあるレンガ棟の先に古民家の里山の家がある。
撮影：2015年2月25日



金沢市民芸術村のある大和町広場（約9万7千㎡）は、市民がスポーツ・レクリエーションに使えるだけでなく、災害時の防災拠点にもなっている。
撮影：2015年2月25日



旧県庁舎は2本の天然記念物「堂形のシイノキ」から命名された「しいのき迎賓館」として保存活用された。撮影：2015年2月25日

金沢では明治・大正・昭和初期の近代建築も数多く保存活用されている。石川県立歴史博物館は、金沢陸軍兵器支廠として明治末期から大正初期に作られた「赤レンガ倉庫」を再活用し、1986年にオープンしている。1891年に旧制第四高等学校として建てられた赤レンガの建物は、その図書館を活用して「石川近代文学館」が1968年に開館し、その後、86年に四高の本館（重要文化財）に移転している。文学館は2008年に旧四高のリニューアルに際し「石川四高記念文化交流館」に統合された。現在、文化交流館は四高の歴史を伝える展示と、多目的に教室の「石川四高記念館」と泉鏡花、徳田秋声、室生犀星など、石川県ゆかりの文学者の資料を展示する「石川近代文学館」の2つの施設により構成されている。

もうひとつ煉瓦造の建物を保存活用したものが、1996年にオープンした「金沢市民芸術村」だ。この建物は1923年から27年の期間に旧大和紡績の工場として建てられたもので、金沢市が購入し、市民の芸術活動を支援する総合文化施設にリニューアルした。「金沢市民芸術村」には音楽やアート、ドラマなどの5つの工房や、金沢市郊外の古い農家を移築した2階建て延べ床面積約300㎡の里山の家などがある。この施設が画期的だったことは、創作活動などの自由な文化芸術活動ができるように、時間的な制約を取り払うため、全国の公立の文化施設として初めて「年中無休、24時間運営」を採用したことだ。また、金沢の伝統文化の伝承を行う建築系人材育成のための金沢職人大学校を併設している。ここでは、金沢に残る伝統的で高度な職人の技の伝承と人材の育成を進め、文化財の修復等を通じ、匠の技への高い社会的評価と一般の理解と関心を深めることを目的としている。

人材育成事業は金沢卯辰山工芸工房でも行われている。金沢の工芸の源流だった加賀藩御細工所の精神と役割を受け継ぎ、伝統工芸の継承、発展並びに伝統産業の振興を目的として設置された。陶芸・漆芸・染・金工・ガラスの5つの工房では、研修者が独自の表現の創作と工芸技術の向上をめざして研修している。伝統工芸や芸術文化の普及・振興を図る人材の育成を通して、個性豊かであり高い金沢文化の向上に寄与する役割を担っている。

市民が集い楽しむ金沢21世紀美術館

中心市街地である香林坊や片町は、金沢駅から少し離れた兼六園に近い場所にある。兼六園と香林坊の間には、県庁や市役所、金沢城公園、県立美術館などがある文化行政ゾーンだった。2代目の石川県庁は矢橋賢吉による設計で1924年に竣工しているが、老朽化が問題となり、1995年に南新保町への移転構想がまとまり、99年に着工、2003年に竣工・移転している。旧石川県庁は免震構造にして、市役所側の建物部分を保存し、金沢城公園側をガラス張りにして開放感を持たせた「石川県政

仲原正治

の

まちある記

記念しいのき迎賓館」として2010年にリニューアルオープンした。(設計：山下設計)

右：公園と文化施設が集積している広坂地区の案内図
撮影：2015年2月25日

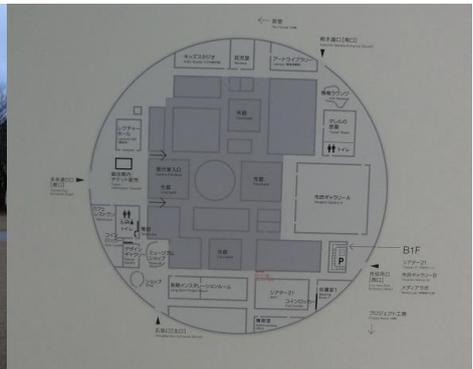


ジェームス・タレルの「ブルー・プラネット・スカイ」には訪れるたびに立ち寄り、その哲学的空間を楽しんでいる。
撮影：2015年2月26日

左：ライトアップも美しい金沢21世紀美術館
撮影：2015年2月25日



右：金沢21世紀美術館の内部配置図
撮影：2015年2月25日



レアンドロ・エルリッヒの「スイミング・プール」はプール底の観客と上部の客がコミュニケーションをとる作品だ
撮影：2015年2月26日

旧県庁の道路を挟んだ向かい側には金沢大学附属小・中学校・幼稚園があったが95年に平和町に移転している。県庁移転等で、中心市街地が疲弊する可能性があるため、95年5月に石川県と金沢市が共同で都心地区整備構想検討委員会を設置した。委員会では学校跡地を市の美術館にすることを決め、96年4月に市は美術館設立準備事務局を発足させた。97年9月には美術館等基本計画策定に向けての専門アドバイザー17名と総合アドバイザー4名を委嘱、翌年に「広坂芸術街（仮称）基本計画」を策定、99年3月には公募で設計者（妹島和世建築設計事務所+SANA A事務所の共同体）を決定し、5月に実施設計に着手している。その後、2004年4月に金沢21世紀美術館条例を公布し、初代館長に蓑豊氏を迎え、10月にオープンした。

仲原正治

の

まちある記



キッズスタジオでは、様々なワークショップが行われている。
撮影：2015年2月26日



香林坊の交差点にある群順治作の「走れ！」
撮影：2015年2月26日



金沢駅バスターミナルからは市内各所に向かうバスが途切れなく出発している。
撮影：2015年2月26日



城下町金沢周遊バスはレトロな雰囲気のバスが走っている。
撮影：2015年2月26日

美術館のオープンに際して、市民には少し難解な現代アートをわかりやすくするために、駅から美術館の経路にパブリックアートを設置し、美術館内にはジェームス・タレル「ブルー・プラネット・スカイ」やレアンドロ・エルリッヒの「スイミング・プール」などの常設作品を設け、わかりやすく楽しめるようにしている。美術館のコンセプトは「世界の「現在（いま）」とともに生きる」「まちに生き、市民と作る参加交流型」「地域の伝統を未来につなげ、世界に開く」「こどもたちとともに、成長する」の4つで、「まちに開かれた公園のような美術館」として、だれもがいつでも立ち寄ることができ、様々な出会いや体験が可能となる「公園のような美術館」を目指している。

建物は、どの方向からも入れるように正面や裏の区別がない円形で、美術館の約半分はパブリックスペース、屋外は公園にして市民が集え、子供たちが遊べるようなスペースになっている。金沢という町の持つ力や意図が設計者に伝わり、素晴らしい美術館となった。

2004年のオープニング時には、市内の小中学生を無料で招待し、後日、家族連れの再来館を導くなど集客の工夫もしている。その結果、開館から7年足らずで100万人の入館者を記録し、現在も年間150万人ほどの人が訪れている。日本の美術館が、ともすれば美術作品を鑑賞することに特化している中で、市民との交流や参加意識を高める管理運営は、地域に開かれた美術館のあるべき姿を具現していると言える。

バス中心の市内の周遊交通

北陸新幹線が開通して、東京からの時間距離が短縮され、多くの観光客が訪れているが、それを受け入れる市内の交通は、バスが中心となっている。バスには、「金沢ふらっとバス」と「城下町金沢周遊バス、兼六園シャトル」がある。「金沢ふらっとバス」は金沢市営のコミュニティバスで、4つのルートを走り、大人は1回100円とお得だ。「此花ルート」は金沢駅から横安江町、小橋町などを周遊。「菊川ルート」は香林坊から犀川大通りなどを周遊。「材木ルート」は武蔵ヶ辻（近江町市場）から浅野川大橋などを周遊。「長町ルート」は長町から武蔵ヶ辻、千日町などを周遊し、いずれも15分間隔で運行されている。（運行は北陸鉄道、西日本JRバスに委託）

「城下町金沢周遊バス」はレトロな雰囲気のバスで、金沢駅から左回りと右回りの系統が15分毎に運行されている。香林坊、広坂・21世紀美術館、兼六園下、ひがし茶屋街経由で金沢駅に戻る左回りルートと、ほぼ逆回りの右回りルートがある。

「兼六園シャトル」は金沢駅を出て、近江町市場、香林坊から、21世紀美術館、兼六園、金沢城公園を廻って、金沢駅に帰るループバスとなっている。いずれの便

仲原正治

の

まちある記

も繁華街である香林坊、武蔵ヶ辻を經由するため、利用勝手が良い。運営は北陸鉄道で料金は大人1回200円、一日フリー乗車券500円となっている。

右：金沢ふらっとバス路線図
撮影：2015年2月26日



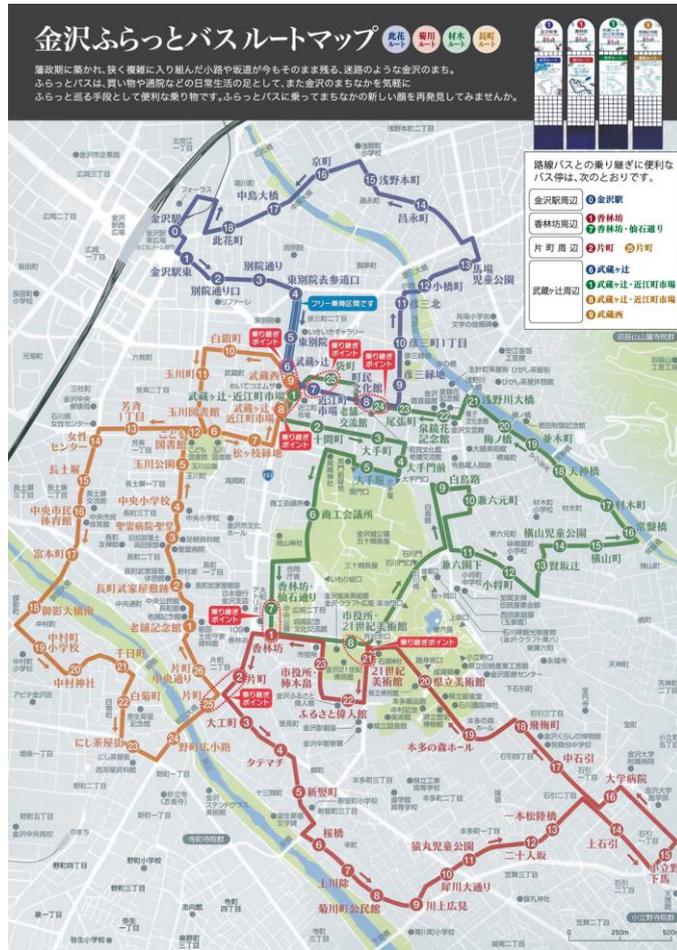
金沢周遊バスのルートに近い犀川河畔には室生犀星の「あんずのうた」の歌碑が設置されている。
撮影：2015年2月26日



「まちなり」の案内書は外国人向けにも作られている。
撮影：2015年2月26日



金沢駅から一番遠い「まちなりポート」がある野町駅。ここから北陸鉄道石川線で鶴来(白山市)まで行くことができる。
撮影：2015年2月25日



もうひとつ、注目するのが「まちなり」と呼ばれている公共レンタサイクルだ。これは2012年3月26日から始まったもので、金沢市内の主な観光地の近く19箇所に貸出・返却ポートがある。基本料金は1日200円(預け金と合わせて1000円の支払い)で30分以内にどこかのポートに返却すれば何回利用しても追加料金はかからないシステムになっている。

金沢市内の中心市街地は平坦な場所が多く、自転車には便利なので利用したが、3年間使用し続けた自転車だったので乗り心地は悪かった。そのため、北陸新幹線開通に伴い、全車両を新しいものに変えたと聞いた。基本料金で済まそうと思うと、30分以内に次のポートまでたどり着く必要があるため、急ぐこともあるが、違法駐輪をせず、観光地の近くに止め、そこでゆったりと過ごし、また、ポートから自転車を借りることができるので、街の周遊にはとても便利だ。ただ、最初に借りる手続きの場所が金沢駅からちょっと離れているので事前に調べることをお勧めする。

新幹線開業に伴うJRから第3セクターへの鉄道移管

今回の金沢行は東京駅から上越新幹線で越後湯沢下車、越後湯沢で北越鉄道「ほくほく線」経由の「はくたか号」に乗りかえ、直江津、糸魚川、富山、金沢までのルートで、横浜駅から金沢駅まで約4時間半の旅だった。越後湯沢駅には、北陸新幹線開業後に「はくたか号」が廃止されるので、感謝や惜しむ気持ちの手作りポスターが掲載されていた。



上越新幹線「越後湯沢駅」から「ほくほく線」に乗り換える乗客。

撮影：2015年2月25日



越後湯沢駅に掲示されていた「はくたか ありがとう」の手作りポスター

撮影：2015年2月25日



当日乗車した「はくたか号」には、すでに「スノーラビット号」の車体が使われていた。

撮影：2015年2月25日

3月14日からの北陸新幹線開通に伴うダイヤ改正により、周辺の第3セクターの列車ダイヤも改正を余儀なくされている。特に「ほくほく線」はドル箱である「はくたか号」が廃止されるため、代わりに越後湯沢—直江津間を1時間弱で結ぶ「スノーラビット号」の運転を始める。途中停車駅は十日町だけで、朝の下り、夕方の上り1本のみでの運行だが、下りは東京駅7時48分発の「MAXとき」に接続できるように越後湯沢9時17分発とし、直江津には10時14分に着くことになる。

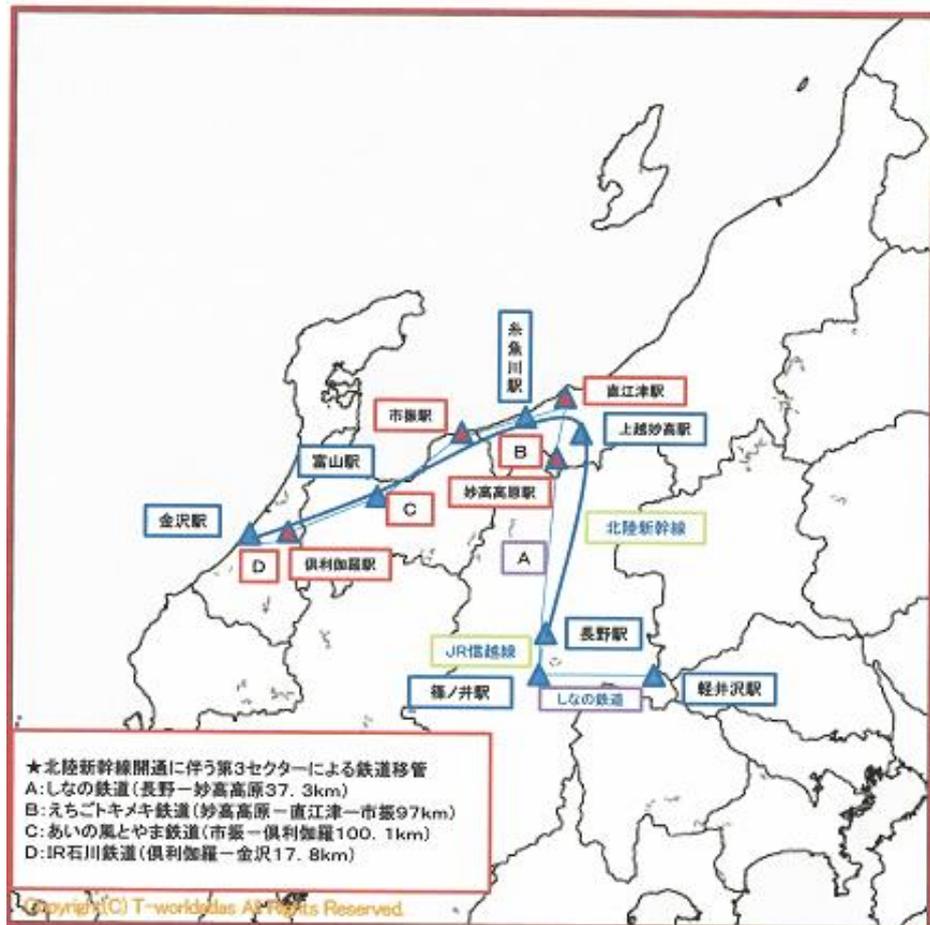


十日町駅にある「ほくほく線」の路線図(撮影：2014年1月26日)

また、北陸本線と信越本線の一部がJRから第3セクターに移管された。新潟県内では、JR西日本の北陸本線の一部(市振—直江津)とJR東日本の信越本線の一部(妙高高原—直江津)が第3セクター「えちごトキメキ鉄道」に移管された。長野県内では、妙高高原—長野間が「しなの鉄道」に移管されたが、しなの鉄道は軽井沢—篠ノ井間をすでに運行しており、中間の長野—篠ノ井間の9.3kmはJR運行のままになった。この区間もしなの鉄道に移管すれば、軽井沢—妙高高原間が同一の運営主体の運行になり効率的だが、なぜ移管しないのか不明だ。その結果、JR信越本線は長野県内の篠ノ井—長野間、群馬県内の高崎—横川間、新潟県内の直江津—新潟間と3つの区間がバラバラに運行される。なお、横川—軽井沢間は路線がすでに廃止されている。

富山県内では、北陸本線の倶利伽羅駅—市振駅間を「あいの風とやま鉄道」が運行し、石川県内では、倶利伽羅駅—金沢間を「IRいしかわ鉄道」が運営するなど、県ごとの第3セクターによる運行に代わる。

第3セクターは、資本を県と県内市町村が提供しており、現在の行政機構が県単位のため、県ごとに鉄道事業者ができてしまっている。県境を超えて路線ごとに周辺自治体が共同で第3セクターを作るほうが効率的だと思うが、現状の都道府県制度下では無理なのだろう。



新幹線は全国新幹線鉄道整備法（昭和45年公布）4条に基づき「建設を開始すべき新幹線鉄道の路線を定める基本計画」が定められ、基本的には建設費は国又は地方自治体、JRが負担し、運行・管理を「旅客鉄道株式会社」（JR）に譲渡することになる。それに伴って、利用者が減少し収入が減る並行在来線と接続する路線をどうするかについては、1996年の「整備新幹線の取り扱いについて政府与党合意」で、（1）建設着工する区間の並行在来線については、従来どおり、開業時にJRの経営から分離する。（2）具体的なJRからの経営分離区間については、当該区間に関する工事実施計画の認可前に、沿線地方自治体及びJRの同意を持って確定

する。(3) JRからの経営分離後の並行在来線について安定的な鉄道輸送を確保するため、当該鉄道事業に係る固定資産について税法上の所用の措置を講ずる。としている。

沿線自治体にすれば新幹線の建設を強く求めているため、並行在来線の経営分離を同意せざるを得ないのが現状だ。そのため、JRから経営分離した並行在来線はすべて第3セクター運営に代わっている。しかし、今までは乗り換えしなくてすんだものが新幹線への乗り換えを余儀なくされる、経営主体が異なるため直通列車がなくなる、運賃が値上げになる、赤字を自治体が補填しなければならないなど、大きな問題を抱えている。

文化資本が豊かな金沢

旅行者にとっては、兼六園・金沢城公園、茶屋街などの歴史探索やまち歩き、加賀友禅や金箔、九谷焼などの伝統工芸品に触れるなどの楽しみがある。ゆったりとした時間が流れる歴史的町並みや町に点在する和菓子や飴の老舗の散策などは、買い物を含めて楽しい時間だ。中心部を流れる犀川、浅野川の二つの河川沿いを散策することも楽しいし、寺院や文学碑なども多く見どころはたくさんある。

卯辰山工芸工房では、陶器やガラス器、漆器、金工、染織の若手作家を公募し、新進のアーティストを育成するとともに、毎年3月に行われるアートフェア東京にもブースを出展して育成作家を支援している。市内のギャラリー「KOGEIまつち」では、卯辰山工芸工房のアーティストや地元の若手作家の作品を扱っている。こうした場所を訪れるのも旅の楽しみだ。

近江町市場では新鮮な季節の食材を買うこともでき、市内には料亭も数多く残っていて、香林坊や片町周辺には新鮮な魚や郷土料理を楽しめる店が軒を連ねている。最近では金沢おでんが有名になり、庶民的な味も楽しめる。筆者も行きつけの「菊一」をよく訪ねるが、車麩や香箱ガニ(冬季のみ)など金沢特有のおでんに舌鼓を打つことができる。夜の繁華街は地元の人と観光客が混在して賑やかで、はじめてあった人とも気持ちよく話が弾む。日本酒も素晴らしく、石川県内には「加賀鳶」の福光屋をはじめ、「手取川」の吉田酒造、菊姫酒造など数十軒の造り酒屋が存在する。

県内には和倉温泉、片山津温泉、山代温泉、山中温泉など数々の温泉があり、少し足を延ばせば能登半島、輪島もあり、観光地には事欠かない。新幹線開業後の観光客の伸びは、金沢城公園、兼六園など市内の観光地は軒並み上昇している。新幹線開業後に金沢城公園、兼六園などの市内の観光地の来訪者数は軒並み上昇している。能登や加賀にはまだ波及効果が少ないと聞いたが、波及効果は少しずつ表れるのではと思われる。



犀川河畔はゆったりとした散歩道となっている。
撮影：2015年2月25日



長町武家屋敷周辺にはいくつかの料亭がある。冬季の「薦(こも)掛け」した堀が美しい。
撮影：2015年2月25日



アートフェア東京2015には卯辰山工芸工房のブースがあり、若手作家の作品が並んでいる。
撮影：2015年3月21日



卯辰山工芸工房では、多くの芸術家が日々研鑽している
撮影：2014年1月26日

仲原正治

の

まちある記



多くの居酒屋や飲食店が並ぶ金沢新天地
撮影：2015年2月25日



筆者が10年以上通っているおでんの「菊一」。今年も訪ねたが、昨年、写真のオヤジさんが急逝し寂しかった。
撮影：2014年1月26日

資生堂名誉会長の福原義春さんは「経済学では経営資源は『ヒト・モノ・カネ』の三つと考えられているが、私はそれに『文化』を加えられないかと考え、資生堂の経営を進めてきた。20世紀の企業が経営資本の蓄積と短期的利益の追求に偏重し本来の存在意義を見失っていたが、文化資本を経営基盤に置けば、人間性や地球環境と矛盾しない持続的発展が可能なのではないか。文化資本は、よりよい未来社会の創造を考えるすべての組織に応用できるはずだ。」という趣旨のことを語っていた。歴史や伝統など、その地方の個性を大切に育てることを「文化資本」と捉え、企業よりも行政のまちづくりにとても重要な要素だ。

現在、日本は人口が減少し、高齢化が進み、経済的な発展も頭打ちになっている。東京・大阪を中心とする大都市圏以外の地方都市は疲弊し、若者の流出は止まらない。まちの歴史や伝統、人材の育成など総合的な文化資本が問われている時代ではないだろうか。そのまちの伝統は何か、特産物は何か、まちの個性は何か、ほかのまちとはどこが違い、何が魅力なのか、これを発掘して、まちの誇りとなるものを大切に育てていく。こうした積み重ねが文化資本を蓄積し、そのことで若者がまちを見直し、まちに定着し、いろいろな人が集まってくるのではないだろうか。今回の旅では、行政も市民も金沢の文化資本を大切に保存し、育てていることを見ることができた。こうした行政と民間が日々研鑽していることで、金沢は文化が魅力となり、今後も訪れる人を魅了し続けるだろう。

2) 「世界遺産にふさわしいか？」—鎌倉市

高校時代に、最初にデートした場所が鎌倉だった。胸をときめかせ横須賀線に乗ったものだ。45年前の鎌倉は、静寂の中に寺社があり、観光地の匂いはしなかった。横浜に住むようになり、最近は何年か、妻と一緒に散歩する。今は、観光地として多くの土産物店が並び、喧騒を感じるが、奥まった場所は自然にあふれ、散歩するにはとても良い場所だ。

富士山が世界遺産に登録され注目されているなかで、鎌倉は世界遺産の登録の推薦を取り下げ、再起を期すことになった。今の鎌倉は世界遺産にふさわしいのか。自分の足で確かめに「いざ鎌倉」。



高校時代にデートした夢
国師の庭園がある瑞泉寺で
は抹茶を飲んだ記憶がある。
撮影：2016年11月14日



鎌倉郡衙があった敷地に建
つ御成小学校の旧講堂は
1933年築
撮影：2013年9月3日



多くの観光客が訪れる鶴岡
八幡宮
撮影：2013年9月10日



源実朝が隠れていた甥の公
暁に暗殺されたといわれる
大銀杏は、2010年3月に老朽
で倒れた。倒れた銀杏の幹は
切断され、隣に移植されてい
る(写真右)。以前の場所に残
った根から銀杏の新芽が出
て(写真左)育てられている。
撮影：2013年9月10日

江戸時代まで続く武家社会の基礎をつくる

鎌倉には8世紀から10世紀ころに現在の御成小学校あたりに鎌倉郡衙（ぐんが・律令制時代の地方の役所）の政庁があった。10世紀後半になると周辺に荘園が乱立し、武力を背景にした領主が生まれ、11世紀には軍事力を統率する源氏や平氏が台頭することになる。鎌倉では1063年に源頼義が鶴岡八幡宮を建立し、そこを拠点に源氏が栄えた。

平治の乱(1159年)の後、伊豆に流されていた源頼朝は1180年に鶴岡八幡宮を政権の所在地と定め、82年には鎌倉の軸線である鶴岡八幡宮から由比ヶ浜まで、まっすぐに延びる若宮大路を整備している。85年には平家を、89年には奥州藤原氏を滅ぼし、1192年に朝廷から征夷大將軍に任ぜられた。この時初めて、関西中心の政治が関東に移り、征夷大將軍を頂点とする武家が朝廷から独立した政治機構をつくり、その体制は江戸時代まで続くことになる。

1199年に頼朝は亡くなり、政権は頼朝の妻政子の実家の北条家に移った。鎌倉幕府は神道と禅宗を中核とする仏教政策を取った。国家・民の安定や安寧のために1252年に大仏の鑄造を始め、53年には北条時頼が建長寺を建立している。まちづくりとしては、鎌倉に至る朝比奈の切通しなど7か所の道の整備、和賀江嶋の築港を行っている。

文永の役(1274年)と弘安の役(1281年)の2回の蒙古襲来(元寇)に勝利した後、北条時宗は戦死者供養のために、82年に円覚寺を建立している。鎌倉幕府の宗教政策は、この時代に次々に寺院を建立することに表れているが、この先、江戸時代まで、武家は神仏を篤く信仰することになった。

仲原正治

の

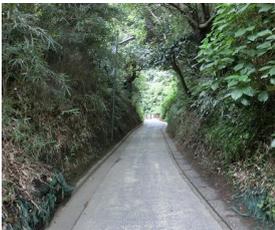
まちある記



鎌倉宮の近くにある源頼朝(1199年没)の墓。現在の墓域は1779年に島津重豪によって整備されたもの
撮影：2013年9月10日



禅宗の円覚寺は北鎌倉駅を降りるとすぐの場所にある、
撮影：2013年5月19日



鎌倉7口の一つ、亀ヶ谷坂切通しは鎌倉駅に通じる道。舗装されていて歩きやすい
撮影：2013年9月10日



日本に禅宗が定着する契機となった禅宗寺院の建長寺、
撮影：2013年9月10日



円覚寺は、谷戸を削り主要な伽藍を直線的に配置していて奥が深い。この先の丘陵地には瑞泉寺に至るハイキングコースが設けられている(撮影：2013年9月10日)

ナショナルトラスト運動のきっかけとなった「御谷騒動」

15世紀半ばに足利幕府が鎌倉支配を放棄したため、鎌倉は衰退したが、江戸時代になると、鶴岡八幡宮は徳川家康によって保護を受け、寺社も復興された。しかし、江戸中心の体制は強く、鎌倉は江ノ島や大山参りなどの代参者の立寄り先としての観光地となっていった。

1889年(明治22年)に近隣の30余の村が、東鎌倉村など6村に統合され、94年には東鎌倉村と西鎌倉村が統合し鎌倉町となった。1939年(昭和14年)に腰越町と統合し鎌倉市が誕生。48年に大船町を編入し、鎌倉市の区域がほぼ固まった(現在の市域面積39.53km²)。

東海道本線が全線開通した年と同じ1889年に横須賀線が開通している。これは1884年に日本海軍の鎮守府が横須賀に置かれ、軍事拠点と東京を結ぶために計画された。その後、鎌倉は東京に近い別荘地として、皇族や政界、財界の有力者が別荘を構え、保養地、観光地として発展した。近くに江ノ島もあり、84年には由比ヶ浜海水浴場も開設されていた。

1923年(大正12年)の関東大震災で大きな被害を受けた鎌倉だが、29年(昭和4年)に「鎌倉山」と名付けられた深沢地区の別荘地の分譲が始まり、その時代に大船—鎌倉山—江ノ島を結ぶ自動車専用道路がつくられている。

仲原正治

の

まちある記



鎌倉山地区の表示塔は、開発を先導した菅原通齋の筆で書かれたもの
撮影：2013年9月3日



モノレール沿線に広がった深沢地区の住宅地
撮影：2013年9月3日



買収した御谷地区の土地には金網が巡らせてあり、立ち入ることはできない。花畑や菜園などとして地域で活用し、金網を撤去できないものだろうか
撮影：2013年9月10日



住民が立てた「史跡鶴岡八幡宮境内保存管理計画」見直しの記念碑のほか、鎌倉市の「古都保存法発祥の地」の看板などが3つ立っている。一つにまとめることはできないのだろうか
撮影：2013年9月10日

1930年には横須賀線が電化され、大規模な開発が進められ、東京近郊のベッドタウンとなっていく。36年には大船に松竹撮影所(2000年閉鎖)ができ、映画関係者や作家、文人などが移り住んでくる。いわゆる「鎌倉文士」と言われる人々が居を構えるようになった。

鎌倉の地形は、三方が低い山で囲まれ、一方は海に面しているため、平地が少ない。そのため、開発を行うためには山を切り崩さないとならない。深沢地区では1960年代に入ると地域内の山林等を削って、住宅開発が行われた。70年には湘南モノレールが開通して住宅地が広がった。

こうした開発が進む中で、1964年に歴史的に貴重な鶴岡八幡宮の背後の山と谷のある森林「御谷(おやつ)」に宅地造成の話が持ち上がる。これに対して地元住民や文化人、僧侶がブルドーザーの前に立ちはだかり体を張って開発を阻止する事件が起こった。「御谷騒動」である。

この事件は環境問題として全国的に大きく取り上げられた。同年12月には財団法人鎌倉風致保存会が設立され、鎌倉を守るための保存区域として、69箇所約850haを認定した。御谷騒動は日本でのナショナルトラスト運動のはしりと言われ、御谷地区は「日本のナショナルトラスト発祥の地」「古都保存法発祥の地」と言われている。

66年には、御谷山林1.5haを市民や企業からの寄付900万円と鎌倉市からの拠出金600万円を合わせた1500万円で買収し保存することとなった。この運動には大仏次郎(おさらぎじろう)をはじめとする鎌倉文士が先頭に立って動いていた。この運動が発端となり同年、「古都保存法(古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法)」が制定され、開発や建築行為を行う場合、歴史的風土保存地区では都道府県知事(政令指定都市の場合は市長)への届け出が、歴史的風土特別保存地区では都道府県知事(政令指定都市の場合は市長)の許可が必要になった。

鎌倉アカデミア

もうひとつ、戦後の鎌倉を象徴する活動があった。材木座にある光明寺がその原点となった「鎌倉アカデミア」である。

鎌倉市観光協会のホームページには「自由学校・鎌倉アカデミア」について

「戦後間もない昭和21年5月、材木座光明寺を仮校舎として鎌倉アカデミアが開校した。学長に哲学者・三枝博音、教授陣には作家・高見順や歌人・吉野秀雄らを迎え「自由大学」「寺子屋大学」とも称された、既成概念にとらわれない教育方針は多くの若き才能を輩出した。作家・山口瞳はじめ、作曲家・いずみたく、タレント・前田武彦等は同校に学んだ卒業生である。」とある。

なぜ、光明寺が選ばれたのかということ、当初予定した鎌倉山が寄付されず、そのた

仲原正治

の

まちある記



鎌倉アカデミア碑の前での話を聞く
撮影：2017年1月31日



浄土宗では「共生」が大切
撮影：2017年1月31日



光明寺境内を散策
撮影：2017年1月31日



光明寺本堂内部
撮影：2017年1月31日



本堂から開山堂への渡り廊下、ここにプラトンの額が掲載されていた。
撮影：2013年9月10日

め、戦火を逃れた鎌倉のはずれの材木座にある浄土宗の学問所であった檀林の光明寺が選ばれた。

庫裡の入口には三枝博音校長自らがギリシャ語で刻んだ「幾何学を学ばざる者、この門に入るべからず」というプラトンの額が掲げられていたが、昭和23年の校舎移転に伴い取り外している。

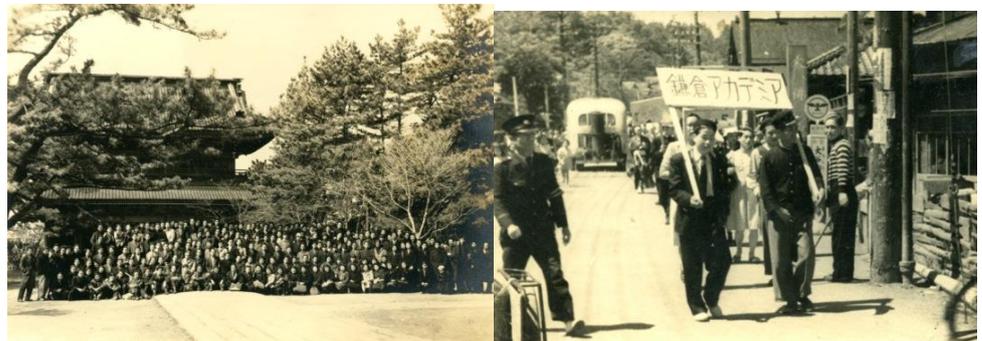
学科は、文学科、産業科、演劇科、映画科の四学科編成だったが、当初から財政困難だったこともあり、4年半後、惜しくも廃校となったが、公開授業や課外授業など、自由な気風に満ちた先駆性は現在、あらためて見直されている。

開校から半世紀を経た1996年、光明寺境内に記念碑が建立された。「ここに鎌倉アカデミアありき」と記された碑は、「教育の原点」を示すシンボルでもある。

別添の写真（観光協会HPより）、光明寺の山門に200名近い教師、生徒が並んだ姿を見ると、当時の学問に対する探究心が高かったことが伺える。

光明寺は浄土宗の寺で、毎年10月12日～15日には十夜法要が行われるが、この間毎日午後六時から行われる声明は、30名近いひとによるもので、感動するとのこと。今年行ってみようか。

なお、鎌倉アカデミアを伝える会という市民実行委員会があり、活動している。「鎌倉アカデミア青の時代」というドキュメンタリーも2016年に完成している。



左：光明寺山門に200名近い教師・生徒が集まった集合写真（鎌倉市ホームページ）

右：市内をデモする鎌倉アカデミアのメンバー（鎌倉市ホームページ）

人口の推移と開発の関係

鎌倉市は、昭和40年代に急激に人口が増え、1960年に9万1000人余だった人口は、5年後の65年には11万8000人余、70年には14万人近くになり、75年に16万5552人となっている。

1966年に古都保存法ができ、歴史や自然環境の保全の取り組みは始まったが、東京一極集中の波は郊外部への居住を促進させた。鎌倉でも周辺部の丘陵地で住宅地開発が活発に行われ、人口が急増した。70年に都市計画法に基づく市街化地域と市街

仲原正治

の

まちある記



「歴史的風土保全区域・風致地区・近郊緑地保全区域図」の告知看板は、鎌倉市内の神社仏閣の入り口等にたくさん設置されている
撮影：2013年9月10日



鎌倉高校前駅付近を走る江ノ電
撮影：2013年9月3日



腰越—江ノ島間など路面を走る箇所があり、当初は路面電車扱だったが、現在は鉄道事業法による普通電車となっている
撮影：2013年9月3日



大船駅を起点とする湘南モノレール
撮影：2013年3月17日

化調整区域の線引きが行われ、73年に新しい用途地域が指定され、その後、風致地区(現在約2194ha、市全域の55.5%)を広く指定することにより、大規模な開発を抑えた。人口の増加は、87年の17万6358人をピークにその後は落ち着いた。

90年代になると人口の減少傾向が進み、99年には16万7136人とピーク時から1万人近くも減少し、市街化の進行は緩やかになった。しかし最近では、通勤通学に便利で、自然が豊かでイメージが良い街「鎌倉」での居住を求める人も多く、17万3907人(2013年1月1日)と盛り返している。高齢化率は約29%と高いので、終の棲家としてゆったりとした気持ちで生活をしたいという人も多いと思われる。

鉄道関係は横須賀線以外に、1902年(明治35年：藤沢—片瀬(江ノ島)間)開業の江ノ島電鉄(江ノ電)があり、1910年に小町(鎌倉)まで延伸し、1949年に現在の鎌倉駅に移転している。江ノ電は昭和40年代にモータリゼーションの波にさらわれ廃線も検討されたが、その後テレビドラマなどで話題となるなど、観光客にも地元にも親しまれる電車として運行されている。

湘南モノレールは1970年に大船—西鎌倉間が開業。翌年には湘南江ノ島までの全線(6.6km)が懸垂式のモノレールとして開業している。軌道は、1931年に鎌倉山に向かう日本最初の有料道路、京浜急行自動車専用道路の上空に敷設された。道路は片側1車線の普通の道だが、30年前ぐらいまでは、大船付近に料金徴収の人がいて、通行料を取られたことを覚えている。料金徴収施設がなく、夜や朝は人が不在で、管理がゆるい有料道路だった。

歴史的風土保存区域		歴史的風土特別保存区地区	
名称	面積(ha)	名称	面積(ha)
朝比奈地区	142	朝比奈切通し特別保存地区	7
八幡宮地区	308	瑞泉寺特別保存地区	119
		浄妙寺特別保存地区	8.1
		護良親王墓特別保存地区	2
		建長寺・浄智寺・八幡宮特別保存地区	172
大町・材木座地区	167.2	永福寺跡特別保存地区	5.7
		妙本寺・衣張山特別保存地区	67
長谷・極楽寺地区	207	名越切通し特別保存地区	20
		寿福寺特別保存地区	18
		大仏・長谷観音特別保存地区	110
		極楽寺特別保存地区	9.8

仲原正治

の

まちある記

		稲村ヶ崎特別保存地区	6
山ノ内地区	158	円覚寺特別保存地区	29
合計	982.2	合計	573.6

歴史的風土保全区域、歴史的風土特別保存地区の面積表（鎌倉市ホームページから）



日本で最初の有料道路の道路上をモノレールの軌道は走る（湘南町屋駅付近）。以前はこの付近に有料道路の料金徴収人がいた
撮影：2013年9月3日



北鎌倉駅前から鶴岡八幡宮に向かう県道21号横浜鎌倉線の巨福路坂（こぶくろざか）トンネル付近
撮影：2013年9月10日



国道134号線は夏は海水浴客で大渋滞を引き起こす
撮影：2013年9月3日



横浜市金沢区の浄土式庭園「称名寺」は1259年北条実時によって建立。現在の境内は1987年に復元されたもの。
撮影：2013年9月3日

自動車交通が昔からの課題

鎌倉は三方を山で囲まれ、道が複雑に入り組み、外敵の侵入に対しては防御がしやすい場所だ。また、一方は海のため、交易や物流に便利であり、幕府の機能をつかさどるには便利な場所だった。「いざ鎌倉」という言葉もあり、交通網が整備され、政治の拠点である鎌倉と各地を結ぶ幹線は鎌倉街道と呼ばれていた。

当時は、徒歩なので不便はなかったが、切通しと言われる昔からの山道を中心にして発達したため、行き止まりも多い。自動車交通は限られた路線で道路幅も狭いため、現代の車社会には不向きだ。鎌倉の中心部に入る主な道路は3本しかない。一本は県道21号横浜鎌倉線で、横浜方面から北鎌倉駅前を通る片側1車線の道。もう一本は金沢八景付近から鎌倉霊園を経て、朝比奈峠を越えて鶴岡八幡宮前に至る県道204号金沢鎌倉線（1956年開通）で、こちらも片側1車線。朝比奈切通しは鎌倉七口の一つで、1200年代半ばには完成しており、1275年頃に誕生した金沢文庫と鎌倉をつなぐ道で現在は遊歩道となっている。

残る一本は国道134号線で、藤沢方面から海沿いに葉山方面に向かう道で、これも片側1車線だ。そのため、平日でも鶴岡八幡宮周辺の道路は渋滞し、休日には大渋滞となっている。国道134号線は海沿いなので拡幅工事などの計画が立てられているが、それ以外の道は地形的にも拡幅が難しい。

鎌倉市では慢性的な渋滞対策としてパーク&ライド方式を採用し、2001年10月から七里ヶ浜で、同年12月には由比ヶ浜で実施し、土日祝日にはシャトルバスを運行している。また2006年4月からは、藤沢市の協力を得て、江ノ電駐車センターにマイカーを止め、江ノ島駅から江ノ電で鎌倉に移動してもらってパーク&レールライドを進め、2008年3月からは稲村ヶ崎でも実施している。1999年11月に実施した国土交通省の鎌倉地域交通円滑化総合実験によると、期間中に一日平均141台、最大で263台が利用し、満足度が高かったとなっている。現在、7月、8月の海水浴時期は駐車場が満杯状況になるため、パーク&ライドは実施されておらず、2012年度の江ノ電駐車センターでのパーク&レールライド利用者は年間4,672台（一日平均15台程度）となっている。また、観光施設周辺には民間の駐車場も多く、そちらを利用する観光客が大半で、パーク&ライドの効果は感じられない。

こうした地形や道の狭さを考慮し、渋滞の解消や地域の健全なアクセスを確保する

ためには交通量規制を考えざるを得ない。日本では実現が困難かもしれないが、地域内への自動車の進入に対して進入税を課すなどの措置を取らないと、解決は難しいように思う。



「歴史的風土保全区域・風致地区・近郊緑地保全区域図」の告知看板は、鎌倉市内の神社仏閣の入り口等にたくさん設置されている
撮影：2013年9月10日



当初は木造だったが、現在の青銅の大仏は1252年に鑄造。何回か改修されているが、現在は台座と仏体が離れる免震構造になっている。国宝に指定されている
撮影：2013年9月3日



大仏の頭部は強化プラスチックで補強されていて内部に入ることができる
撮影：2013年9月3日

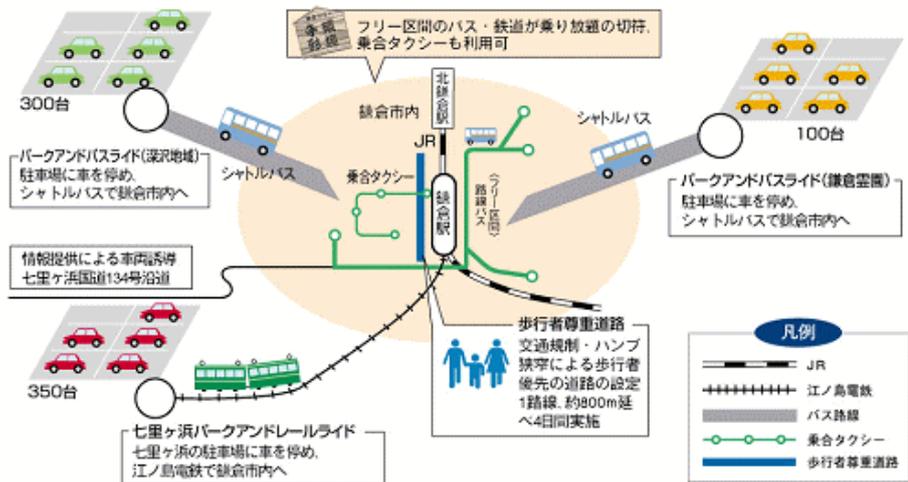


大仏前の片側1車線の舗装道路や土産物店。世界遺産にふさわしい町並みと言えるかどうかは確かに疑問だ
撮影：2013年9月3日



江ノ電の路線図。藤沢ー鎌倉間約10kmを33分で結ぶ（撮影：2013年9月3日）

●休日交通の集中する観光都市である鎌倉市におけるマイカー転換誘導策(平成11年11月)



鎌倉地域交通円滑化総合実験時のパーク&レールライド概念図（国土交通省ホームページ）

世界遺産登録の推薦取り消し

2013年5月1日、文化庁はICOMOS（国際記念物遺跡会議）の勧告を記者発表した。その内容は次のようなものだった。(1)「富士山」については、三保の松原を除き「記載」が適当との勧告がなされた。(後日、三保の松原も一緒に登録された)(2)「武家の古都・鎌倉」については、「不記載」が適当との勧告がなされた。諮問の評価結果は、1. 記載：世界遺産一覧表に記載するもの、2. 情報紹介：追加情報の提出を求めたうえで次回以降に再審議するもの、3. 記載延期：より綿密な調査

や推薦書の本質的な改定が必要なもの、4. 不記載：記載にふさわしくないもの(世界遺産委員会で不記載決議となった場合、例外的な場合を除き再推薦は不可)の4つに分類され、鎌倉は最下位の4. 不記載だった。

理由は「現在の構成資産では、主張する価値のうち武家の精神的な側面は示されているが、防御的側面については部分的にのみ示されており、さらにその他の観点(都市計画、経済活動、人々の暮らし)についての証拠が欠けているという完全性の観点、および比較検討の観点から、顕著な普遍的価値を証明できていない」となっている。史跡などについて物的な証拠が少ないか限定的であり、資産の周辺が都市化されていることの影響などが無視できないなど、都市化の波にあらわれた側面が評価を低くした原因と考えられる。

鎌倉の歴史的遺産は1992年(平成4年)に「古都鎌倉の寺院・神社ほか」としてユネスコ世界遺産委員会の暫定リストに掲載され、鎌倉市は1996年に「総合計画」で世界遺産登録を目指すことを明記した。2007年には関係する神奈川県、横浜市、逗子市が合同で「世界遺産登録推進委員会」を設置し、2012年1月に「武家の古都・鎌倉」の推薦書が国からユネスコ世界遺産センターに提出された。同年9月にはユネスコの諮問機関ICOMOSによる現地調査が行われ、2013年4月30日に「不記載」勧告があった。この不記載の勧告を受け、5月27日に国に対して、推薦の取り下げを要請し、再チャレンジを期すことになった。

鎌倉市は勧告を受け、(1)埋蔵文化財の調査研究など歴史的遺産を守る、(2)歴史的風土特別保存地区をはじめとした鎌倉の貴重な緑・景観を守る、(3)渋滞対策など、市民の暮らしを守る、の三つの柱に重点を置いてまちづくりを進めるとしている。



鎌倉市将来都市構想イメージ(鎌倉市交通マスタープランから)

世界遺産とは？

2013年、富士山が世界遺産に登録され、改めて注目されるようになったが、世界遺産は「世界の文化遺産と自然遺産の保護に関する条約(世界遺産条約)」が1972年の第17回ユネスコ総会で満場一致で採択され、75年に条約が発効されたのが始まりである。78年にガラパゴス諸島など12件(自然遺産4件、文化遺産8件)が最初に世界遺産リストに登録され、現在、981件に上っている(自然遺産193件、文化遺産759件、複合遺産29件)。

日本の世界遺産条約の批准は1992年と遅れ、126番目の加盟国になった。現在190か国が加盟しているが、世界遺産は偏在していて、イタリア、スペイン、フランス、ドイツをはじめとするヨーロッパや中国などで多くの物件が登録されている。日本では、今年、文化遺産で登録された富士山を始め17件が登録されており、そのうち、自然遺産は、屋久島、白神山地、知床、小笠原諸島の4件で、残りは古都奈良や京都などの文化遺産で複合遺産(文化遺産と自然遺産の複合)は登録されていない。

世界遺産ができた背景には、1960年代にエジプトのアスワン・ハイ・ダム建設によってヌビア遺産が水没する危機が懸念されたことがある。これをきっかけに「開発」から世界的な遺産を守ろうと誕生した。日本では、世界遺産に登録されると、周辺の観光に大きな影響を与え、白神山地や白川郷などで登録後に観光客の急激な増加があり、住民とのトラブルも発生している。

自治体は世界遺産への登録について積極的で、現在でも文化庁の暫定リストには群馬県富岡製糸所と絹産業遺産群、国立西洋美術館本館など13件が掲載されている。政府は、九州と山口県など8県にまたがる「明治日本の産業革命遺産」を2015年度の登録を目指し、推薦する方針を固めている。

ちなみに、世界遺産の価値がなくなったものは登録が抹消されるが、ドレスデンのエルベ渓谷は市内の渋滞解消のため4車線の橋の計画が決まり、2009年に登録が抹消され、橋は今年8月26日に開通した。ドレスデンは、住民投票で橋の利便性を選んだが、文化芸術も豊かで、今でも住民は「世界に誇れる街だ」と自負している。

鎌倉散策

鎌倉に遊びに来るときは、北鎌倉で降りることにしている。そこから、縁切り寺として有名な東慶寺の脇を通り、源氏山経由で大仏や銭洗い弁天に向かう道(大仏コース約4.5km)を行くか、円覚寺や建長寺、明月院(アジサイ寺)の裏山へ出て、天園コース(約6km)を辿り、瑞泉寺、鎌倉宮に向かうか、その日の気分どちらかを歩くように心がけている。京浜東北線港南台駅からほど近い円海山から天園コースに至る道もある。



縁切り寺で有名な東慶寺は1285年に北条時宗夫人覚山尼によって開山。明治4年まで600年にわたり、女人救済のための縁切り寺法を引き継いできた
撮影：2013年5月19日



ハイキングコースとはいえ、寿福寺付近には急勾配で狭い箇所もあるので、歩きやすい靴を履いていなければ難儀する
撮影：2013年5月19日



北条政子の墓がある寿福寺には大仏次郎など有名人の墓も多い
撮影：2013年5月19日

仲原正治

の

まちある記



円覚寺に至る天園ハイキングコースの瑞泉寺側の入り口
撮影：2013年9月10日



鎌倉市佐助の「銭洗い弁天」には多くの観光客が訪れる
撮影：2013年9月10日



キャッシュカードを洗う人がいて現代的だと納得したが、筆者はお札を洗ったので、この札で宝くじを買おうと思う
撮影：2013年9月10日



神奈川県立近代美術館の設計は坂倉準三。2016年に鶴岡八幡宮との間で敷地の賃貸借契約が終了するため、建物の存続が問題となっている
撮影：2013年9月10日
後日、神奈川県が返還したが建物は残すことになった。

こうしたコースは、ほとんどが舗装されていない山道で、起伏もあり雨の時には十分に注意しなければならない。先日も、源氏山公園から、普通の人にはあまり訪れない北条政子の墓のある寿福寺に抜ける道を通ったが、一人しか通れない狭い坂もあり、難儀した。鎌倉はハイキングにはとても手ごろで、秋の紅葉の名所の仮粧坂（けわいざか）など行楽にはお勧めのスポットだ。



鎌倉の観光案内図には寺社やハイキングコース等が掲載されている(撮影:2013年9月10日)

鶴岡八幡宮の境内にある神奈川県立近代美術館鎌倉館は、1951年に日本初の公立の近代美術館として誕生した。八幡宮の緑豊かな空間と周りに池を巡らせた建物は、日本の近代建築の代表の一つに数えられている。美術館で作品を鑑賞して、ゆったりと八幡宮を参拝するのも良いし、小町通りを散策して食事をしたり土産を買ったりするのも楽しみだ。

私が好きな商店街は御成通りで、路地に入ると美味しいパン屋や骨董屋などがあり新しい発見ができる。御成通りの中ほどには、昔病院だった近代建築があり、今は公益財団法人鎌倉風致保存会が借上げ、事務所として使用している。

必ず立ち寄るのが農協連即売所だが、いつも季節の地の野菜が並べられていて、新鮮で安い。この即売所は昭和3年開設だが、当時は不況で、農村も生産だけではなく直販で自立することが必要だと考えられて開設された。

仲原正治

の

まちある記



電線の地中化が完了し、すっきりした小町通りは、休日には多くの観光客が訪れる
撮影：2013年5月19日



御成通りの旧安保小児科医院は1925年築。取材当時は公益財団法人鎌倉風致保存会の事務所があった。
撮影：2013年9月3日



農協連即売所は、正月以外は毎日営業している
撮影：2013年9月3日

鎌倉の寺社には古い歴史があり、その場所の特徴や個性が感じられる。それは宗教的なものだけではなく、豊かな緑や季節の花だったりする。アジサイ寺で有名な明月院。花寺の瑞泉寺、宝戒寺（はぎ寺）など、数多くあるが、どの寺に行っても季節を彩る花が咲いていて、心を和ませる。

鎌倉の山道や奥まった寺社を歩くと、先人たちの足音が聞こえる気がして都会の喧騒を忘れることができる。一方、大仏など有名な施設を廻ると周辺には土産店がたくさん並んでいて民間駐車場では客引きが声をかける姿をよく見かける。このどちらも鎌倉である。

今回、喧騒と静寂の同居する古都・鎌倉で本当に世界遺産として残したいものが何なのか、結局わからなかった気がする。しかし、世界遺産に登録しなくても、鎌倉には非日常の場がたくさんある。散歩やハイキングも楽しめ、食事や美術鑑賞もできて、ゆったりとした休日を過ごすことができる。さあ、今度の休みには「いざ鎌倉へ」。

3) 「8月6日」に平和を祈るー広島市

広島・長崎に「原爆」が投下されたことは小学生時代に学び、恐ろしいという意識しかなかった。中学に入学してクラス担任の教師(若林徳子先生)に出会い、「広島」が自分の中で大きくなった。彼女は広島で原爆を受けた時に窓ガラスで咽喉の部分切り、その手術跡が大きく残っていた。最初の授業で広島体験を聞いて大きな衝撃を受けたことを今でも覚えている。

放射能の怖さは、その後もビキニ環礁での水爆実験(1954年)で被害を受けた第5福竜丸などもあり、日本人は世界で一番、放射能被害を受けた国民だ。今、東日本大震災の原発事故から2年半近くが経ち、人々の問題意識が少しずつ希薄になっている。今回、原爆投下から68年目の8月6日に平和の原点である広島で原爆、放射能の恐ろしさを認識したいと思った。



現在の広島城の天守閣は1958年に復元されている。
撮影：2013年8月5日



広島大本營のあった場所
撮影：2013年8月5日



広島陸軍幼年学校は門柱と記念碑だけが残っている
撮影：2013年8月5日

広島を中心市街地はデルタの上のっている。

広島は川の発達とともに発展してきた。現在の市街地が広がる太田川流域は、土砂が堆積して砂州や自然の堤防ができ、デルタが形成された土地だ。広島を中心部は太田川を埋め立てた土地で、多量の雨が降ると洪水に見舞われることが多く、1965年に太田川放水路を作り、水害を防止している。昔から舟運が盛んで、太田川の上流から材木や木炭、鉄などが運ばれてきていたため、市内には現在でも、雁木(がなぎ)と呼ばれる荷揚げ場が数多く残っている。



広島城の配置図をみると大本營の跡など、軍都広島を思わせる。(撮影：2013年8月5日)

16世紀後半に、毛利輝元がこのデルタの上に築城し、「広島」と命名したと伝えられている。関ヶ原の戦いで敗れた毛利は、長州方面に移され、福島正則が安芸・備

仲原正治

の

まちある記



上空 600m で原爆が炸裂した島病院には、多くの観光客が訪れている。
撮影：2013 年 8 月 5 日



島病院の前に掲示されている爆心付近の当時の写真
撮影：2013 年 8 月 5 日



爆心から 1.3km の広島通信病院は一部建物が残り、多くの被爆者がここで治療を受けた。こうした案内板が市内に数多く設置されている。
撮影：2013 年 8 月 5 日



1913 年築の広島陸軍被服支廠（ひふくししょう）は爆心から 2.68km だが、鉄製の窓は熱風で曲がっている。現在、建物は活用検討中だ。
撮影：2013 年 8 月 5 日

後 49 万 8 千石の領主となったが、福島も改易され、1619 年から浅野家が入ってくる。江戸時代に広島城周辺が干拓され、市街地が形成され、1820 年頃には、城下の総人口約 7 万人の都市に成長した。

明治 21 年（1888 年）に第 5 師団が広島に置かれ、翌年（1889 年）に市制がひかれたが、当時は面積 27 万 km^2 、人口 8 万 3 千人余の都市だった。広島港の前身の宇品港が 89 年に完成した後は、日清日露戦争を契機に軍関係の施設が多く設置され、満州事変（1931 年）以降、軍都としての性格が強くなった。1940 年代には、中国軍管区司令部（旧第 5 師団の再編）が中国地方の防衛のかなめとなり、旧制中学 1-2 年（13-15 歳程度）の少年を幹部将校候補に育成する全寮制の陸軍幼年学校も広島に置かれた。

原爆が広島の中心部で炸裂

1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日午前 8 時 15 分、人類史上最初の原子爆弾の炸裂により、約 35 万人を抱える広島市は一瞬にして焦土と化した。この爆弾の発する放射線による急性障害が収まった 45 年 12 月末までに 14 万人が死亡したと推計されている。人口統計を見ると、42 年（昭和 17 年）には 419,182 人だったが、徴兵や疎開で 44 年に 336,483 人になり、原爆投下の後の 45 年には 137,197 人と 20 万人近くが減っている。

原爆は、東経 132 度 27 分 27 秒、北緯 34 度 23 分 29 秒、原爆ドームの対岸の広島市細工町（さいくまち）29-2、島病院の上空高度約 600m で爆発した。

爆発時の爆発点の温度は 100 万度を超え、爆心地周辺の地表温度は摂氏 3,000-4,000 度に達し、熱線による火傷で多くの人々が亡くなった。爆心から半径 2km 内の地域では木造は壊滅、鉄筋コンクリートの建物も窓が吹き飛ばされ内部は焼失するなど、建物はほとんど形を成さず、鉄の扉も熱風で溶けている。

2012 年の広島市の調査によると、原爆投下時の広島市と隣接町村の一部にいた「直接被爆者」は 384,743 人、投下後に爆心地付近に入って被爆した人や被爆状況不明の人を合わせると 557,478 人に上っている。また、平和記念公園内にある広島平和記念碑（原爆死没者慰霊碑）に納められた名簿に登録された原爆死没者数は 280,959 人（2012 年 8 月 6 日現在）となっている。いかに多くの人々が、原爆で亡くなり、その後も後遺症で苦しんでいるのかがわかる。

当時、筆者の義父は陸軍幼年学校で教鞭をとっていた。少年兵は郡部に疎開していたため、直接の人的被害はなかったが、幼年学校の場所では戦争末期に結成された本土決戦のための第 224 師団の軍人など 80 名が原爆で亡くなっている。たまたま、義父は早目のお盆休暇を取得して義母と一緒に福島県いわき市に帰省していて難を逃れている。義父は原爆が投下された 1 週間後には広島に立ち、被災地での

仲原正治

の

まちある記

救援活動等に加わった。当然、放射能を浴びているし、もし義父が当時広島に滞在していたら、筆者の妻は存在していなかったのかもしれない。85歳で亡くなった義父は話好きで、酒を酌み交わしながらよく話をしたが、なぜか広島の話は、ほとんど話してくれなかった。



原爆目標となった相生橋
撮影：2013年8月5日



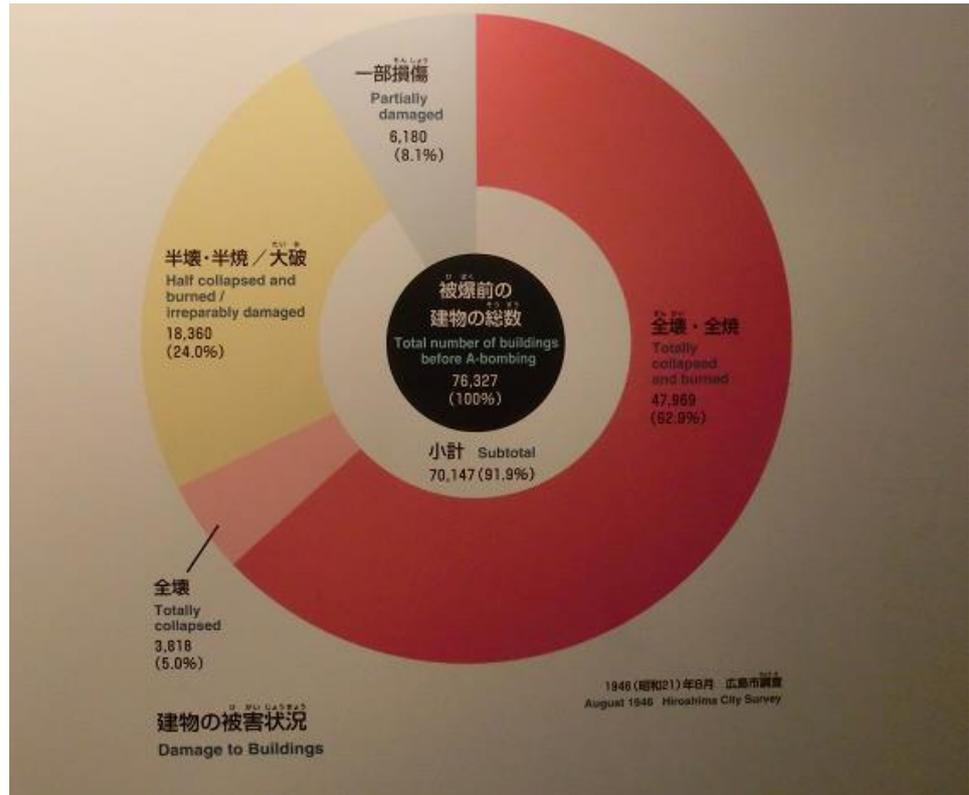
原爆慰霊碑の前で祈りをさ
さげる外国人観光客
撮影：2013年8月5日



幅100mの平和大通りは市民
が緑化運動を推進し1965年
に完成。8月6日は一部が歩
行者天国になっていた。
撮影：2013年8月6日



現在はレストハウスとして
使われている「大正屋呉服
店」(1929年築)は休憩所兼
土産店で利用されている。
撮影：2013年8月5日



広島市の1946年調査では、建物の70%以上が全壊・全焼した。(撮影：2013年8月5日)

戦後のまちづくりの基礎を作った丹下健三

原爆で70年は不毛の地と言われたが、46年には人口約17万人、48年には22万4千人、51年には30万人を超える人々が、広島に定住を始めている。

戦後、46年秋に広島の復興都市計画を決定しているが、これには復興院から派遣された丹下健三(当時は東京大学助教授)が関わっていた。計画はできたが、財源が足りない状況が続いたが、49年8月6日に公布された「広島平和記念都市建設法」が後押しし、道路や橋、住宅などの整備が本格的に始まった。戦災復興土地区画整理事業では、原子爆弾によって壊滅した市の中心地の半径2kmを中心として、1,520haを対象地にして、西部を県が東部を市が施行することとした。最終的には1,093haに縮小されたが、幅員100m(平和大通り)などの道路建設や官庁街の整備など、現在の広島市の基礎を築いた事業だった。

「広島平和記念都市建設法」の主な内容は、①平和のシンボルとして広島平和記念

仲原正治

の

まちある記



被爆者の手の映像を、原爆ドーム前の河岸に投影したクシシュトフ・ヴォディチコ（ヒロシマ賞受賞）のTシャツを着て船上にいる筆者。原爆ドームは、1996年に世界遺産に登録された。
撮影：2013年8月5日



丹下健三の設計の原点となったと言われる平和公園の一直線の都市軸
撮影：2013年8月5日



平和記念館は1955年6月、平和記念資料館が8月に開館し、94年に平和記念館を建替え、2館を一体として「平和記念資料館」として開館している。2006年に戦後の建物として初めて国の重要文化財に指定された。
撮影：2013年8月5日



イサム・ノグチがデザインした平和大橋の欄干
撮影：2013年8月5日

都市を建設する。②平和都市にふさわしい文化施設をつくる。③国と地方自治体はできるだけ援助を与える。④必要があれば国有財産を無償で与える。⑤市長及び市民は平和都市を建設する義務がある。という内容で、市民にも平和都市を建設する義務を謳っている。

原爆ドーム付近は、当時繁華街だったが、原爆ドームもチェコ人の建築家ヤン・レツツェルによる設計で「広島県産業奨励館」として使われていた。被災後、被爆の辛い思いを残したくないという考え方と、記念として「残す」という二つの考え方があったが、次第に保存しようという考え方に傾き、66年に広島市議会で保存決議し、原爆ドーム保存の募金も6,600万円に上り、67年に保存工事を行っている。その後も、2回の保存工事を行い今日に至っている。

一方、平和記念公園のある地域は、現在はレストハウスとして使われている「大正屋呉服店」だった建物を残して壊滅している。そのため、ここに平和記念公園と平和記念館をつくることになり、1949年にコンペを行い、当選した丹下健三計画研究室（丹下健三・浅田孝・大谷幸夫）の設計で、54年には平和記念公園を開園させている。丹下と一緒に広島で活動した当時大学院生だった建築家の大谷幸夫は、中国新聞のインタビューに対して次のように答えている。

「広島デルタは東西に走る中国山地と、北から南に流れる太田川水系が形づくる。市民になじみやすい東西と南北の「軸線」で街にドラマを生みだかった。東西は市民活動の中心となる平和大通り、南北は苦心して、何枚もの絵を丹下が描いたが、偶然にも「ピース」という銘柄のタバコの箱の裏に描いたアイデアに固まった。それが原爆ドーム、原爆慰霊碑、原爆資料館と一直線に並ぶ公園の原型だ。ドームを原爆体験を受け継ぐ象徴とし、復興への「旗印」とする見事な案だった」

原爆慰霊碑は、原爆犠牲者の霊を雨露から守るため、屋根の部分をつ輪の家型にし、中央の石室（石棺）には、亡くなった原爆被爆者すべての名前を記帳した名簿が納められている。この設計を丹下は芸術家の領域と考え、アメリカ国籍のイサム・ノグチに依頼したが、「原爆を落とした国の人間」がつくるという理由で反対され、丹下自身がデザインしている。平和大橋も原爆で壊れ、1952年に新しく架けられたが、欄干のデザインはイサム・ノグチによるものである。

日本最大規模の路面電車網

広島に路面電車が開通したのは1912年（大正元年）11月23日。現在の広島電鉄の前身である広島電気軌道（初代社長は大林組の創業者大林芳五郎）によって広島駅—櫓下（やぐらのした・その後相生橋と名称が変わり、現在は原爆ドーム前駅）間、紙屋町—御幸橋間、八丁堀—白鳥間が開業。同年12月には相生橋（櫓下）—己斐（こい・現在は西広島）間を開業し、15年には宇品線の開業により港と結ばれるように

なる。

広島のように路面電車を町の基幹交通として残している大都市は珍しい。高度成長にともなう車社会の台頭は、全国の路面電車を廃止に導いた。札幌、仙台、東京、横浜、京都、大阪など、大都市の路面電車は一部を残してほとんどが廃線となっている。現在、地方都市では函館や富山、福井、長崎、熊本などに路面電車が残っている。路面電車の軌道は目に見えるため、わかりやすく迷子にならないので、特に旅行者や高齢者には便利だ。



被爆電車と言われる「650形」の路面電車。現在3両が走っているが、ラッシュ時やイベント、貸し切り利用が多くなかなか発見できない。撮影：2013年8月6日



京都市電だった路面電車には「祇園」の看板が付けられている。撮影：2013年8月6日



最新型の5100形グリーンムーンパーmaxは2005年にグッドデザイン賞を受賞している。撮影：2013年8月6日



広島電鉄の路面電車系統図（撮影：2013年8月5日）

広島電鉄の路面電車は、原爆投下時に123両あった電車の90%近くが被災したが、8日には宮島線を全線運行させ、9日には西天満町一己斐間の片側運転を開始、10月には広島駅前一己斐間が復旧する。その後も電車の復旧に力を注ぎ、広島市民の復興の支えになっていた。しかし、使用できる車体は少なく、電車にぶら下がる乗る人がいるなどいつも超満員状態だった。鉄道も被爆翌日には宇品線が平常運転、8日には山陽本線が開通し、電車が走ることによって街は活気づいた。

広島電鉄は現在も9路線で、日本最大規模の路線を誇り、150円の均一運賃（八丁堀—白鳥間は100円）で運行されている。現在使用されている車両は、最新型の5100形グリーンムーンパーmaxから京都市電や西日本鉄道九州線の再利用車、被爆した650形車両も被爆電車として運行されるなど、動く路面電車博物館となっている。広島に路面電車が数多く残ったのは、道路幅も広くエコであるということだけではなく、戦後すぐに復活させ、それが広島市民の復興の力となったことが大きな理由と考えられる。

1995年に広島で開催された第2回路面電車サミットにおいて、6月10日を路面電

仲原正治

の

まちある記



1957年7月から2009年3月31日まで広島東洋カープの本拠地として使われていた旧広島市民球場は外野席の一部を残して取り壊されている。現在、球場の跡地活用が課題となっている。
撮影：2013年8月5日



旧広島市民球場の敷地に設置されているセ・リーグと日本シリーズ優勝の碑
撮影：2013年8月5日



衣笠祥雄が現役引退まで2215試合連続出場(世界記録)を果たした記念のレリーフ
撮影：2013年8月5日

車の日と定め、この頃に日本各地で路面電車の利用促進のキャンペーンやイベントが行われている。ちなみに「路面電車の日」は6月10日=「ろ(6)テン(10)(路電)」の語呂合わせだ。

復興のシンボルだった広島カープが赤ヘル軍団に

30年以上前だが、広島市民球場でヤクルトスワローズと広島カープの試合を見に行った。筆者は国鉄スワローズ時代からのファンなので、3塁側の席に座って観戦した。ヤクルトのマニエルがホームランを打ったので、立ち上がって手を叩いたら、周りが冷たい目で筆者をにらむ。ビジター側だが広島ファンが大多数で、球場全体が広島ファンで埋め尽くされていたのを覚えている。

広島カープは、親会社がない形で発足した唯一の球団で、球団名に企業名を付けていなかった。1949年12月にカープの経営母体となる「広島野球倶楽部創立準備委員会」が設けられ、県議会が設立助成を決議し、全体資金2500万円の内、県と広島、呉、福山、尾道、三原の5市の予算から950万円を出し、残りを民間から集めることとした。全額は集まらなかったが、郷土のチームとして1950年に発足した。その後も深刻な資金難は続き、給料の遅配や遠征費が払えないなどの事態に陥ったが、市民はこの危機に際して、年200円会費の後援会を発足させ、51年7月までに13,000人以上により270万円余が寄せられるなど、様々な募金活動で球団を支えた。その後も資金難が続いたが、1968年に東洋工業(現マツダ)社長の松田恒次が筆頭株主になり、球団名を広島東洋カープに変更、東洋工業をメインスポンサーにして落ち着いた。この間、1950年~1967年、連続してBクラスに低迷し、国鉄スワローズとともに最下位が指定席だった。

1975年、ジョー・ルーツ(1925-2008)が監督に就任。球団のぬるま湯的な体質改善のために、チームの帽子の色を紺から「赤」に変えた。これが、「赤ヘル」の始まりだ。彼は、選手に対して「闘争心」、勝つことの意義、全力プレーを教え、それを実践した。しかし、開幕早々の4月27日に審判と衝突、退場を命じられたが拒否。球団社長が監督を説得し、その場は引き下がったが、グラウンド上での指揮権を球団社長が侵害したことを理由に退任し、約半年間の監督生活を終えた。15試合6勝8敗1引分だった。

彼の意志を受け継いだコーチの古葉竹織が監督となり、衣笠祥雄、山本浩二などの活躍で、球団設立から26年目に初めてセ・リーグ優勝を勝ち取った。この優勝はルーツの過激なチーム改革があつてこそだ。

広島市の都市ビジョンと観光

広島市は2011年3月に都市ビジョンの改定を行った。そこでは「国際平和文化都



原爆ドームの近くにある元
安川オープンカフェ
撮影：2013年8月5日



ハウステンボスで使われて
いた「パルーン号」が観光船
として使われている。
撮影：2013年8月5日



2013年7月～9月はJRのデ
スティネーションキャンペ
ーンで、いたるところに広島
県の観光ポスターが掲載さ
れていた。
撮影：2013年8月5日



「広島一街と暮らしの50年」
には、復興に向かう広島の様
子が鮮明に記録されている。

市」として、都心において魅力的な都市空間を形成するためには、市民・企業等と行政の多様な主体が参画し、長期的視点に立った共通目標を持ってまちづくりを進めていくことが求められるとしている。そして「魅力ある都心づくりの目標と将来イメージ」では「人を魅きつける広島之都心づくり」として、「行きよい」「歩きやすい」「にぎわい・交流する」「居心地よい」「住みよい」の5つをあげている。

その5つの中で、「にぎわい・交流する」を取り上げると、3つの大きな要素として、「公共空間・公共施設の有効活用」のために、平和大通りや公園などの公共空間を活用してオープンカフェやイベント、フリーマーケットなどを日常的に実施させ魅力向上を図るとともに、旧広島市民球場跡地利用を促進させるとしている。また、「水の都ひろしま」として、魅力あふれる都心の形成を進め、川岸緑化や親水護岸による水辺空間の形成やオープンカフェなどの実施を進める。そして、「地域資源の活用による活気や魅力の創出」として、拡大都心核での賑わいを楽しみながら回遊できる快適な歩行者ネットワークの形成や路面電車を観光資源としてとらえ、平和の道、文化の道、西国街道の魅力づくりに取り組むとともに、歴史・文化を感じてもらふ観点から観光資源を整備し、河川遊覧船や水上タクシーなどの利用を促進するとしている。全体として観光を軸とした政策になっている。

現在の広島市の人口は、1,185,250人(2013年7月末)だが、1947年以降は毎年人口が増えている。また、2012年の観光客数は1,087万3千人(前年比1.9%増)で、2005年から8年連続で1,000万人を上回っている。

★入込観光客数の推移							
区 分	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	前年との比較	
	(2008年)	(2009年)	(2010年)	(2011年)	(2012年)		
入込観光客	1,043万5千人	1,004万8千人	1,057万1千人	1,067万3千人	1,087万3千人	20万人	1.9%
一般観光客	981万8千人	943万9千人	991万8千人	1,006万9千人	1,019万7千人	12万8千人	1.3%
修学旅行生	30万7千人	30万5千人	31万4千人	32万7千人	31万3千人	△1万4千人	△4.3%
外国人観光客	31万人	30万4千人	33万9千人	27万7千人	36万3千人	8万6千人	31.00%

入込観光客数推移(広島市ホームページ、2013年6月11日記者発表資料)

産業面では、戦前は「軍都」の性格が強かったため、旧軍事施設が数多くあり、それを工業用地に転用するなどしてきた。また、良好な港湾を抱え、自動車や造船、鉄鋼などの「重厚超大型産業」が発展し、中国地方第一の工業県に発展した。代表的なマツダ(旧東洋工業)は三輪トラックのシェアが80%(1969年)を占める企業で、その後、ロータリーエンジンの開発で一躍注目を浴び、4輪車市場でも台頭してきた。オイルショック以降は経営危機に陥り、1979年にフォードと資本提携を行ったが、その後業績が回復し2010年にフォードから独立している。現在でもマツダを中心に、すそ野が広い自動車関連の企業が多いため、他の政令指定都市に比べて第2次産業が頑張っているが、年々、割合は減少しており、第3次産業にシフトされてきているのが現状だ。

仲原正治

の

まちある記

第3次産業では観光産業は非常に大きな要素で、世界遺産の「安芸の宮島」や呉市、江田島などを含めた安芸地方(中国地方)の観光地の一つとして、多くの外国人や修学旅行生が訪れている。広島市では修学旅行生に原爆の惨状や歴史を知ってもらうため、「広島—街と暮らしの50年」という本を発刊し、修学旅行に訪れる学校には無料で配布している。



八丁堀駅交差点の福屋百貨店は爆心地から710mで被爆したが建物の外観は残り、現在も使われている。
撮影：2013年8月6日



多くの客でにぎわう本通り商店街
撮影：2013年8月5日



一大歓楽街の夜の薬研堀・流川近辺は飲食店や風俗関係も多く賑わっている
撮影：2013年8月5日

広島市中心市街地

戦後の広島の再生は急ピッチに行われた。多くの人々が疎開先から戻り、新たに街を復興させようとする人々も増えてきた。1951年には30万人を超える人口を擁する都市になり、1980年には全国で10番目の政令指定都市になった。こうした中で、生活を支える商店街や百貨店などの商業施設は、紙屋町、八丁堀駅周辺に集中している。



紙屋町交差点付近の地図(撮影：2013年8月6日)

紙屋町交差点周辺には銀行、県庁、証券会社などのオフィスや、そごうなどの百貨店、地下街の紙屋町シャレオがある。また、八丁堀交差点付近には三越、福屋、パルコなどの商業施設があり、近隣には本通り商店街、中央通商店街、えびす通り商店街など数多くの商店街があり、中国地方最大の繁華街となっている。

広島市は、こうした中心市街地を抱えているが中心市街地活性化基本計画は定めていない。都市ビジョンがその代わりとなっているが、現在の中心市街地は様々な課題を抱えている。ひとつは、戦後に建てられた建物も70年近く経ち、老朽化して

仲原正治

の

まちある記



縮景園にある雁木。縮景園は広島藩主浅野長晟（ながあきら）が、1620年から別邸の庭園として築成したもので、作庭者は茶人として知られる上田宗箇。
撮影：2013年8月5日



シジミ採りを行っている人に釣果を尋ねたがダメだねえという返事だった。
撮影：2013年8月5日



海から見た基町の公営住宅群は大高建築設計事務所の設計で1972年～76年竣工だ。
撮影：2013年8月5日



島病院の前で観光客に説明するボランティア
撮影：2013年8月5日

いること、不況が長引いていることで、オフィスが空洞化現象を起こしていることだ。また、少子高齢化や不況が影響して商業関係も売り上げの伸びを欠いている。少し古い統計だが、2007年6月に実施した広島市の商業統計調査では、3年前に比べて、事業所数が7.9%減、従業者数で7.3%減、年間商品販売額で4.2%減となっている。

こうした傾向に歯止めをかけるためには、町の中の回遊性を高めることと、個性と魅力を備えた商店街づくりが欠かせない。

現在の広島市が進める商店街活性化事業は、アドバイザーの派遣や商売（あきない）知恵出し事業など市民団体と商店街を結ぶ事業、広報やイベント支援などの商店街振興事業であり、町の未来や方向性を考えて実践する事業は見つからなかった。広島市は中国地方の中心都市で、支店経済に支えられ、シャッター商店が少ないが、このまま放置すると、いずれは商店街が疲弊していくことが考えられる。

川から眺め、街を探索する

今回、広島駅に着いてすぐに駅近くの栄橋から原爆ドームまで、川から街の探索をした。昔ながらの雁木（がんぎ）を拠点に街と町、人と川を結び、川の有効活用を実践しているNPO法人雁木組が運営する水上タクシー「雁木タクシー」を利用した。8月5日11時頃は30度を超える暑さだったが、船上は涼しい風が吹いて気持ちを和ませる。船からは多くの雁木を発見できるが、川沿いには多くのマンションが立ち並んでいる。葦が群生している場所があり、季節になると川サギの繁殖も見られるとのこと。途中、「シジミ採り」の漁を行う人もいて、川が生活と密接に結びついていたことを思わせる。

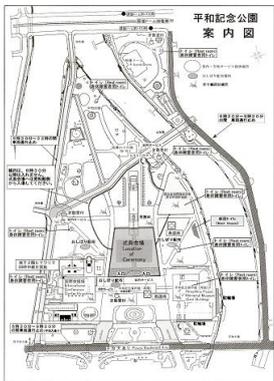
広島城に隣接する基町（もとまち）地区は、戦後、木造密集地帯が形成され「原爆スラム」とまで呼ばれた地区だが、再開発により約4,500世帯の公営住宅になっている。

市内を歩くと平和公園や象徴的な被爆建物だけではなく、いたるところにボランティアがいて、原爆の悲惨さや当時の状況を語ってくれる。彼らの語る言葉の重みは、多くの観光客、修学旅行生、外国人を真剣にさせる。

紙屋町、八丁堀付近のデパート、地下街、商店街は買い物客で賑わっているが、夜になると、流川通りや薬研堀通りの多くの飲食店で、観光客や地元の人たちが、食事を楽しんでいる。一人で居酒屋に入った筆者も、店の人や隣に座った東京からの観光客と様々な話をした。それは、自分の戦争や原爆に対する思いや福島での原発事故についてだったりする。こうした会話が普通にできるのは、8月6日の前日の広島だったからかもしれない。



平和祈念式で挨拶する安倍首相と多くの聴衆
撮影：2013年8月6日



平和記念公園案内図。会場では多くのボランティアが冷たいおしぼりや水を配布していた。（「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」で配布された冊子より）



「核兵器は絶対悪」を一面に掲載した中国新聞の特報は、当日会場で配られた。
撮影：2013年8月6日

平和祈念式で平和を祈る

8月6日8時15分「黙とう」という声とともに、会場を埋め尽くす人々、会場の周辺で活動する人々、すべての人がその1分間だけ静寂に包まれた。

初めて参加した平和祈念式だが、数多くの団体や個人が会場周辺で、拡声器を使って平和の尊さを訴えている。チラシが配られ、労働団体や宗教団体が原爆の恐ろしさや平和の尊さを声高に訴えていた。しかし、筆者が一番貴重だったのは「黙とう」という「沈黙」の時間だった。この1分間という凝縮した時間に、広島市民、そして亡くなった人々の思いが全世界に伝わっていくと感じた。

式典では、広島市長が、原発輸出を可能とする原子力協定の交渉をインドと進めていることを批判し、「核兵器は絶対悪」と断言、多くの共感を生んだ。次に登壇した小学生2名は祖父母に対する思いを語り、「平和への誓い」を読み上げ、多くの人々を感動させた。残念ながら安倍首相の挨拶には、核兵器の廃絶に向けたメッセージはあったが、原発に関する発言はまったくなかった。

核兵器は現在、核弾頭として世界に1万7000発あると言われている。それも広島に落とされた原爆の数千倍の威力を持っている。そして、原発の原子炉は、世界に約430基存在する。使用年数が長くなった施設も多く、核廃棄物の使用済み燃料も莫大な量になっている。

人を殺す核兵器と平和利用を進めてきた原発は違うものと言われ、安全神話がつくられてきた。しかし、私たちは原発の崩壊によって、原発も核兵器と同じことが起きるのだと再認識した。

震災から2年半、福島では自分の家に帰ることができない人がたくさんいる。広島から帰り、飯館村に行き、村の職員に話を聞いたら、除染を進めているとマスコミや国は言うが、実際には実験的に一部の地域を除染しているだけで、まったく見込みが立っていないと話していた。福島第一原発からは高濃度の放射性物質が海に垂れ流され、解決のめども立っていない。こうした状況で、9月には、大飯原発が定期検査で停止するため、日本では原発が一基も稼働しなくなる。それでも日本は原発なしで十分にやっていけそう。南海トラフ地震の可能性も言われる中で、「原発」がこれからも必要なのか、もう一度問い直したい。

4) 「観光と自然災害」を考える一箱根町

「箱根の山は天下の嶮(けん)、函谷關(かんこくかん)もものならず・・・」(「箱根八里」滝廉太郎作曲 鳥居枕(とりいまこと)作詞)と唱歌でうたわれた箱根。その箱根山の火山活動が活発となり、一時は噴火警戒レベル3まで引き上げられ、今でも一部の地域の立ち入りが禁止されている。そのため、観光客も減少し、地域の経済は相当なダメージを受けている。今回は、箱根の山を探索して、その観光の魅力と火山活動による被害の現在を伝えたい。

江戸時代の「箱根」

箱根の湯は、700年代半ばに浄定坊(じょうじょうぼう)が「惣湯(そうゆ)」(湯本温泉)を開湯したと言われている。奈良・平安時代に整備された「古代七道」の東海道は、西国から関東へは金太郎伝説で有名な足柄峠を越え、坂本駅(南足柄市関本)から小田原、国府津へ向かうルート(足柄道)だったが、鎌倉時代に箱根山越えの湯坂道(箱根湯本から三島に抜ける道)ができている。

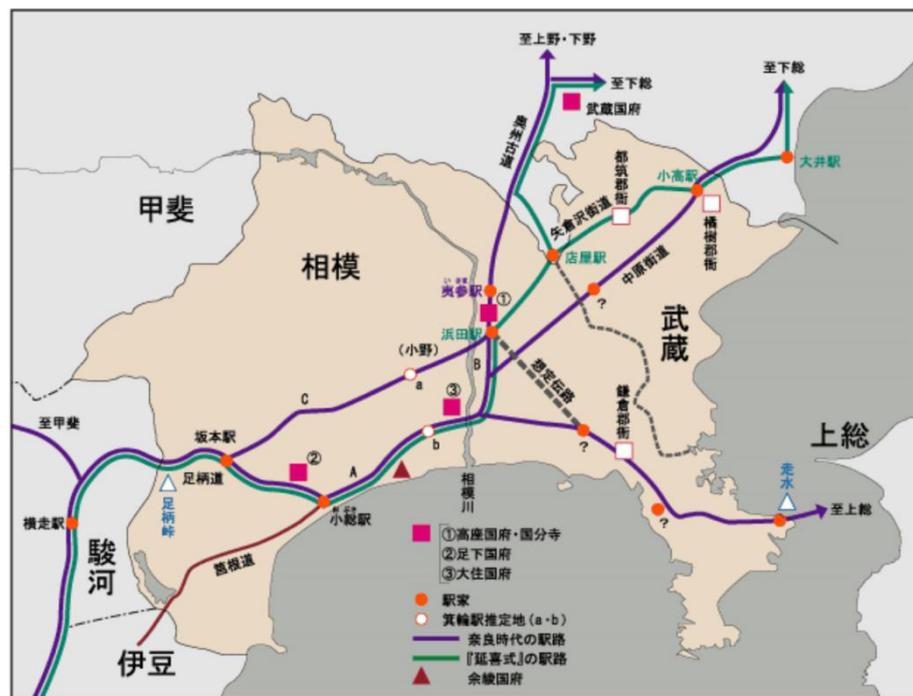
16世紀末、豊臣秀吉が小田原征伐のために箱根に陣を構え、北条氏を滅ぼし、その後、徳川幕府になり、江戸初期に湯本から畑宿を経て箱根につながる東海道が整備された。



箱根湯本の熊野神社の下には、奈良時代に「惣湯」といわれた「箱根温泉発祥地」の石碑がある。湯元からは現在も温泉が湧いていて、近隣の旅館に供給されている。
撮影：2015年8月3日



箱根関所は発掘調査などを行い、大番所・上番休息所、厩、雪隠、京口御門などの建物の復元を行ない2007年春に全面公開された。
撮影：2015年8月27日



古代七道時代の東海道のルート図(国土交通省横浜国道事務所ホームページ)

徳川幕府は箱根を自然の要塞と考え、現在の芦ノ湖畔に 1619 年（元和 5 年）頃に箱根関所を設置した。箱根山を一日で越えることが難しく不便なため、ほぼ同時期の 1618 年に、西国大名の要請により箱根宿が作られた。そのため、宿は東海道では一番多い 6 か所の本陣を構えていた。箱根には奈良時代から箱根権現があり、元箱根地区は門前町だったが、箱根宿は芦ノ湖畔の原野に新しく作られている。関所は明け六つ（午前 6 時ころ）から暮れ六つ（午後 6 時ころ）の間しか通行できないこと、道も険しいため、旅人にとってはつらい関所と山越えだった。江戸時代は、参勤交代で江戸にいる大名の家族の女性が江戸から出ていけないように、武器（鉄砲）を持ち込まないように「入り鉄砲 出女」を厳しく取り締まった。そのため通過に時間がかかり、関所ができたことにより、箱根宿は交通の要所となり宿場町、温泉場として発展していった。



旧東海道は現在、交通量が少なくなっている、旧道沿いには公衆浴場「弥坂湯」もあり、650 円（大人）で入湯できる。撮影：2015 年 8 月 3 日



現在の箱根の山の案内図（撮影：2015 年 8 月 3 日）

箱根は多くの旅人を悩ませる難所だったが、一方で、箱根七湯といわれた豊富な温泉は、湯治場として多くの湯治客が訪れてきた。1686 年に稲葉氏から大久保氏に小田原藩政が変わった時の引継ぎ書によると、湯本・塔ノ沢・堂ヶ島・宮ノ下・底倉・木賀・芦之湯の七湯が記載され、湯坪も塔ノ沢 12 か所、宮ノ下 11 か所など、七湯で 47 の湯坪の記載があり、当時から「箱根七湯」として有名な湯治場だった。当時の湯治客は、江戸だけではなく、上総や下総、津久井、三島など南関東や伊豆方面からも訪れている。江戸中期の 1781 年には鳥居清長が「箱根七湯名所」を刊行

仲原正治

の

まちある記

するなど、当時から保養地として湯治客に人気があったようだ。

現在は、江戸時代からあった姥子（うばこ）の湯のほか、明治以降に開発された大平台・小涌谷・強羅・宮城野・二ノ平・仙石原・湯ノ花沢・蛸川・芦ノ湖を加えて「箱根十七湯」とも呼ばれている。



1891年(明治24年)に建てられた本館は登録有形文化財、近代化産業遺産。
撮影：2015年8月18日



1936(昭和11年)築の「花御殿」は入母屋と校倉を模した壁が特徴的で、登録有形文化財、近代化産業遺産だ。
撮影：2015年8月18日



箱根湯本から強羅まで40分弱で走る「箱根登山鉄道」。
撮影：2015年8月18日



勾配が80%（パーミル 1000m進む間に80mの高低差）という箇所がある「箱根登山鉄道」は途中3か所でスイッチバックを行う。
撮影：2015年8月18日

富士屋ホテルと外国人観光客

箱根関所が廃止になった1869年以降、交通の不便さが箱根の発展を妨げてきた。しかし、山口仙之助は山間部の箱根宮ノ下に500年の歴史がある「藤屋」を買収し、洋風に改築し、富士山にちなみ「富士屋ホテル」と改称し、1878年(明治11年)に日本初のリゾートホテルをオープンさせた。当時は、道路も未整備状態だったために、小田原からは人力による運搬を行い、食材などを運び入れている。しかし、1883年に火災によりホテルは焼失、その後、84年に平屋の洋館で再出発、何回か増築を行い、1891年(明治24年)に現在の富士屋ホテル本館を建てている。

当時の箱根の交通の不便さを解消すべく、旅館経営者有志は許可を得て、人力車の通れる道路を塔ノ沢一宮ノ下間に1887年に完成させている。

同年には、新橋—国府津間の鉄道も開通し、88年に国府津—小田原—湯本間の小田原馬車鉄道が開通、89年には東海道線が全線開通(新橋—神戸)し、少しずつ交通網が整備されてきた。馬車鉄道はその後小田原電気鉄道と名前を変え、1900年に国府津—湯本間の電車運転を開始している。

1901年にホテルにとっては重要なツールである電話が宮ノ下郵便局に開設され、保養地、温泉地としてより一層、外国人観光客が数多く泊まるようになってきた。

1919年(大正8年)には箱根湯本—強羅間に箱根登山鉄道が開設され、観光地、別荘地としてますます注目を浴びてきた。強羅から早雲山までの箱根登山ケーブルカーも1921年に運行を開始している。こうした開発が進み始めた時期の1920年(大正9年)に東京—箱根間の大学駅伝が始まったことは、当時としては画期的な行事だった。駅伝の創設は、マラソンの父と言われる金栗四三らの「世界に通用する長距離(マラソン)ランナーを育成したい」との思いだったと言われている。

富士屋ホテルはその後、関東大震災(1923年)で大きな被害を受け、1930年には懸案だった食堂を新築している。また、第2次大戦中は軍に施設を提供し、在来外国人外交官や家族などの収容施設として利用され、一般客を入れる余地がなくなっていた。戦後は連合軍に接收され、マッカーサーやアイゼンハワーなどの著名人が宿泊している。その後、米軍との貸与契約による貸し切り状態が続き、54年7月から一般営業を再開している。

仲原正治

の

まちある記



早雲山駅に到着した箱根登山ケーブルカーの乗車客は外国人観光客が大半だった。撮影：2015年8月18日

箱根登山ケーブルカー Hakone Tozan Cablecar		早雲山駅 Sounzan Stn.		運賃表 Fares		上段 (黒字/black) 大人 Adults 大人 어른		下段 (赤字/red) 小童 Children 兒童 어린이	
早雲山 Sounzan	80 40	上強羅 Uegahara	170 90	中強羅 Nagatsuta	250 130	公園上 Koenjima	330 170	公園下 Koenjima	420 210
強羅 Gorokuro	550 280	彫刻の森 Chokokuji no Mori	550 280	小涌谷 Koyogoyu	550 280	宮ノ下 Miyonodake	690 350	大平台 Ootaira	780 390
塔ノ沢 Tanosawa	820 410	箱根湯本 Hakone Yumoto	900 450	入生田 Iryudate	960 480	風祭 Kazumatsuri	1040 520	箱根板橋 Hakone Itabashi	1090 550
小田原 Odawara									

早雲山から強羅までのケーブルカーと「箱根登山鉄道」の運賃表 (撮影：2015年8月18日)

週休二日制が観光地を変える

1889年の町村制施行時は、湯本、温泉、宮城野、仙石原、箱根、元箱根、芦之湯の7村だったが、その後合併で5村になり、1956年に合併し現在の箱根町となった。1950年に小田急線が小田原—箱根湯本間に乗り入れ、道路も62年に箱根新道、64年に乙女バイパスも開通し、高度成長期には、別荘、企業の保養所、ホテルなどの開発も進み、誰でもが楽しめる行楽地、温泉地となっていった。

昭和の高度成長期には、会社の慰安会の一環として社員旅行が当たり前で、どこの会社でも、一泊の温泉旅行を楽しんでいた。東京や横浜の会社では、年に数回、半ドン（土曜日の午前中に仕事をして、午後からは社員旅行をするというパターン）がふつうで、東京から2時間程度の熱海や箱根のホテルや保養所などで宴会を行うのが恒例の行事だった。また、宿泊してホテルや旅館を利用した会議なども多く、学術関係や企業の研修会、行政関係の会議などが頻繁に実施された。筆者も1970年代には、何回も箱根のホテルでの懇親会を兼ねた会議に出席した記憶がある。こうした会合や社員旅行が少なくなった原因の一つが、週休二日制の実施だ。

日本の休日制度は1876年(明治9年)に、明治政府が日曜日を休日、土曜日を半休(半ドン)と決めた時から始まっている。土曜日を全休とする週休二日制は1980年代頃から徐々に普及し、89年に銀行が土曜日の窓口業務を中止、92年に国家公務員が完全週休二日制を実施し、地方公務員もそれにならって全国に普及していった。88年に労働基準法(第32条)の改正で週40時間が最大労働時間となり、企業では割増賃金を支払わないかぎり働かせることができなくなったこともあり、週休二日制がふつうになっていった。公立学校では2002年に完全週休二日制が実施されたが、私立学校は除外されている。

また、休日まで会社の上下関係を持ちこみたくないことや、個人の旅行に対する意識の変化もあり、バブル経済崩壊後は、団体旅行よりも個人的な旅行が主流になっていった。そのため、団体旅行で支えられていた熱海などのホテル等の倒産が相次ぐようになっていった。また、不況により、会社や自治体の保養所なども次々に売



芦ノ湖畔の県営駐車場が大学箱根駅伝の往路のゴール地点となっている。目の前には「箱根駅伝ミュージアム」がある。撮影：2015年8月27日



1980年代には年数回、会議などで訪れた箱根湯本温泉街。撮影：2015年8月18日



姥子(うばこ)温泉地区には、多くの企業の保養所や別荘が集積している。この看板地図の上の部分(姥子)から早雲山方面の道は現在封鎖されている。撮影：2015年8月27日

仲原正治

の

まちある記



姥子温泉地区にある企業の
保養所
撮影：2015年8月18日



仙石原にある「港区立箱根ニニコ高原学園」は区立小学校生徒の郊外施設として、移動教室や夏季学園として利用されている。
撮影：2015年8月28日

り出されたり、経営を民間に任せたりするようになった。そのため、温泉地、保養地は厳しい経営を迫られてきていた。

箱根の火山と現在（2015年9月22日）の状況

箱根山はカルデラ火山で、カルデラは東西約8km、南北約12km、外輪山は玄武岩や安山岩の成層火山群からなっている。最近1万年間の活動は、マグマ噴火としては約8000年前、約5700年前、約3200年前にあったが、その後は水蒸気爆発のみで最近では12世紀後半～13世紀に計5回ほどあったとされる。昭和以降は、噴気、鳴動、地震などはあったが、本格的な噴火はない。

気象庁は2015年4月26日から大涌谷を震源とする火山性地震が増加し、5月5日には箱根湯本で震度1を観測する地震が3回発生し、傾斜計で地震活動に関連する変動が観測されたため、5月6日に箱根山に火口周辺警報・「噴火警戒レベル1(平常)」から「警戒レベル2(火口周辺規制)」に引き上げを発表した。

また、6月29日には、新たな噴気孔の周囲において、火山灰等の噴出物の堆積による盛り上がり、ロープウェイ大涌谷駅付近で降灰を確認し、翌30日に「火口周辺警報・噴火警戒レベル3(入山規制)」を発表した。

左：噴火警戒レベル3の時点での大涌谷を中心とした立ち入り禁止地区の地図
撮影：2015年8月18日

右：噴火警戒レベル2に引き下げられた後、9月14日に発表された「大涌谷周辺立入規制マップ」
(箱根町ホームページ)



箱根町は警戒レベル2への引き上げに伴い、5月6午前6過ぎに、想定火口域(半径300m)からの避難指示を防災無線で伝え、大涌谷は立ち入り禁止となった。箱根ロープウェイは全線が運休、大涌谷周辺の遊歩道や観光施設、おみやげ店も閉鎖され、県道734号は大涌谷周辺の約1kmが通行止めとなった。その後、6月30日に警戒レベルが3に引き上げられ、県道の早雲山・姥子間を規制し、姥子、上湯場、下湯場、箱根早雲郷別荘地の一部に対し避難指示を発令した。町では火山活動の活発化に伴い、7月3日に災害対策基本法第63条に基づき、大涌谷周辺の想定火口域から約700mの範囲を警戒区域とし、立ち入りを規制した。

左：8月26日に発表された「箱根山（大涌谷）火山避難計画」の避難対象区域図。（噴火警戒レベル3の時点）外側の緑の点線がマグマ噴火で避難勧告する4kmの範囲（箱根町ホームページ）

右：火山の噴火警戒レベル表（気象庁ホームページ）



火山の「噴火警戒レベル」		
レベル	火山の状況	住民・登山者らの行動
特別警報	5 避難	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫 危険な居住地域からの避難が必要
	4 避難準備	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される 居住地域での避難の準備、災害時要援護者の避難
警報	3 入山規制	居住地域近くまで重大な影響を及ぼす噴火が発生、または予想 災害時要援護者の避難準備等、登山禁止・入山規制等
	2 火口周辺規制	火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生、または予想 火口周辺への立ち入り規制等
予報	1 平常	火山活動は静穏 特になし



早雲山から大涌谷に向かうハイキングコースは立ち入り禁止となっている。
撮影：2015年8月18日



桃源台～早雲山間のロープウェイは現在も運行中止となっている。桃源台駅からは、芦ノ湖を周遊する海賊船に乗ることができる。
撮影：2015年8月27日



県道734号線、姥子温泉近くにある通行止めの看板と柵（噴火警戒レベル3の時点）
撮影：2015年8月27日

箱根町では、2014年9月に発生した御嶽山の噴火災害を教訓に2015年3月に「観光客や住民等の命を守るための対策を最優先とする」として、「箱根山の噴火を想定した大涌谷周辺の観光客等の避難誘導マニュアル」を作成していた。そして、8月26日には箱根火山防災協議会にて「箱根山（大涌谷）火山避難計画」が承認され、今後は、本計画を基に火山対策を進めていくことになった。ここでは、水蒸気噴火の場合の噴火警戒レベル4及びレベル5に対する避難計画を策定し、想定火口域の中心から2.1km内の住民、観光客、約1万5000人を対象に、3段階の避難方法①避難地域ではコンクリート造などの堅固な建物への避難、②2次避難場所への車両による避難③バスなどによる小田原など遠方への避難を明示している。

また、マグマ噴火の噴火警戒レベル4及びレベル5については、想定火口域の中心から4kmの地域に避難指示を発令するなど、細かく避難方法等を明示している。そして、今後、町は箱根火山防災協議会等と連携し、住民等、各種施設及び自治会等を対象とした避難勧告又は指示等の情報受伝達訓練、避難誘導訓練などを実施していくことにした。

火山避難計画策定後、8月下旬以降は、地震も減り山体の膨張も停滞化したこともあり、9月11日に噴火警戒レベルを2に引き下げ、箱根町は、警戒区域を縮小し、交通規制を一部解除した。

仲原正治

の

まちある記

左：車両等通行禁止が明示されている案内図（噴火警戒レベル3の時点）
撮影：2015年8月27日

右：早雲山の県道に設置された「立ち入り禁止」の看板
撮影：2015年8月27日



いつもの夏休みは観光客が多い強羅駅だが、乗り降りする客も少ない。
撮影：2015年8月18日



強羅地区の緊急避難場所案内図
撮影：2015年8月18日



自然災害の予知は誰が責任を負うのか

2009年4月6日に発生したイタリア中部地震（被災地ラクイラ）では、死者300余人、負傷者1600人以上、避難者6万人を超える大災害だった。この地域では、数か月にわたる群発地震が続いていたため、地震発生直前に地震が起きるかどうかを判断する検討会が開催された。出席したのはイタリアの防災関係委員会の大学教授や地震学者と行政の幹部。会議では大地震の可能性は低いと結論づけられ、それが報道され、多くの市民が安心して避難を行わなかった。しかし、発表の6日後にマグニチュード6.3の地震が発生し、多くの市民が犠牲になった。

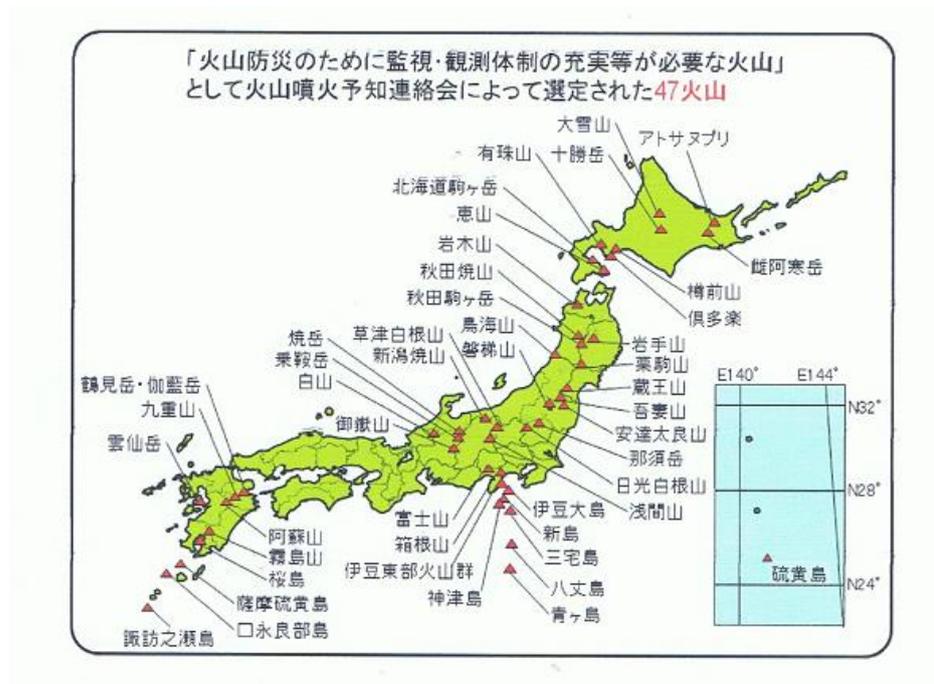
イタリアの検察当局は、大地震の危険性を警告せず、逆に安全だと宣言した判断の間違いについて、2011年5月に過失致死罪で学者ら7人を起訴した。12年10月の一審判決では、全員に求刑の4年を上回る禁固6年の実刑判決を言い渡した。被告側は控訴し、2審では学者6人が無罪、行政関係者のみが執行猶予付き禁固2年の減刑判決を受けた。

この事例で問題なのは「火山・地震」という自然災害に対して、どこまで予知が可能かということと、予知する学者等の責任はどこまでの範囲なのかということだろう。日本では、東日本大震災も阪神淡路大震災も予知できなかった。東海地震や南海地震について、予知は可能とされているが、地震予知連絡会の約30人の委員は、どういう根拠で、科学的に説得できる内容で予知を行うのだろうか。

2014年9月の御嶽山の噴火では死者58名、行方不明者5名を出したことは記憶に新しい。また今年になって、5月29日に口永良部島で噴火があり、全島民が避難し、噴火警戒レベル5となっている。桜島では8月15日に噴火警戒レベルを4に引き上げ、有村町、古里町、黒神町の3地区に避難勧告を出している。その後、火山性地震が減少し、地盤の隆起もみられないため9月1日に噴火警戒レベル3に戻した。9月14日には阿蘇山で火山の噴火があり、噴煙が火口から2000mまで上がり、噴

石が飛散し、気象庁は噴火警戒レベルを2から3に引き上げ、火口から半径4kmを立ち入り禁止にした。次々に日本列島で火山の噴火が観測されている。

2003年に火山噴火予知連絡会は「概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」を「活火山」と定義し直し、「休火山」「死火山」という表現を使わないようにした。現在、活火山の数は110で、活火山の中でも特に監視・観測体制を充実させる必要があるとされる47火山では地震計や遠望カメラなどを整備、24時間体制の観測が行われている。気象庁では、最近の全国的な火山活動の活発化に対して、来年度予算で「火山監視・警報センター」の設置や大幅な人員増の概算要求を行っている。



「火山防災のために監視・観測体制の充実等が必要な火山」と選定された47か所の地図（気象庁ホームページ）

日本列島の狭い国土の中に100以上の活火山があり、江戸時代の1707年には富士山が噴火したという記録もあり、日本人は有史以来何回も噴火や地震、津波の被害を受け、いつの時代も自然の災害と戦いながら暮らしてきた。

こうした自然災害が頻発する日本で、原子力発電所を再稼働することが本当に大丈夫なのかは、誰もが心配していることだろう。自然災害の予知は難しいが、イタリアでは判断の間違いを過失致死で訴追している。原発は自然現象ではなく、人の手で作りだしたもので、絶対に安全なものとは言えない。また、原発で使用された放射性廃棄物は各地で保管され、その処理の方向性も決まらず、年々増加している。多くの火山に囲まれ、災害が続く日本で、原子力規制委員会や政治家は、原発再稼

仲原正治

の

まちある記

働を推進し、何かあった場合にどのように責任を取れるのだろうか。

噴火警戒レベル3の「箱根」に宿泊する

箱根町は8月26日に、8月に行った火山活動の活発化による産業への影響調査の結果を発表した。調査は宿泊、飲食、物販、交通、観光施設の126を対象に行ったが、7月の宿泊施設の実績は前年比で64.7%と減少、9月分の宿泊予約者も40%以上減少しているなど厳しい状況となっている。7月の実績は飲食業も約59%、土産物約56%、観光施設が約57%、電車・バスなどの交通が65%と前年比で大幅な減少となっている。

神奈川県では、箱根などの観光客の減少対策として、国の地方創生交付金を活用して1万円の旅行券を5千円で買えるプレミアム旅行券を発行している。しかし、7月発行分をコンビニでネット販売したら2分で完売し、多くの県民から苦情が寄せられた。こうした商品券は組織的に購入され、すぐにインターネットで転売されるケースも多く、ホテルや旅館にとっては役に立つかもしれないが、庶民の手には届かない。

いつもは夏休みで賑わっていて、予約がなかなか取れない仙石原のリゾートホテルに8月に入ってから、8月下旬の宿泊予約をしたら、すぐに大丈夫との返事。やはり、観光客が減少しているようだ。

久しぶりのドライブで箱根に行ってみた。芦ノ湖では「海賊船(遊覧船)」が就航し、復元された箱根の関所も普通どおりの営業をしている。夏休みの木曜日の午後だったが、観光客の数はあまり多くなく、外国人の割合が多く感じた。8月中旬に箱根登山鉄道とケーブルカーを乗り継いで早雲山まで訪ねた時も外国人観光客の姿が目立った。観光客の絶対数は減っているが、外国人はふつうに旅行し、楽しんでいいる。箱根にある様々な美術館などを訪れる人も少ないようだ。

いったんホテルに入ってしまうと、そこはゆったりした空間と癒してくれる「温泉」が待っている。以前と変わったことは、透明だった温泉の色が赤く変色していることくらいだ。従業員に理由を聞いても、原因はわからないが、噴火警戒レベル3になってからだと言った。

夜は、近くのフレンチレストランで食事をした。店の人に尋ねると、観光客よりも地元の方が多く店なので火山の影響はあまり感じていないと言っていた。とても美味しい店なので、その日も満席状態だった。友人家族と一緒に食事は楽しい。店に持ち込んだ赤ワインを料理と合わせながら、箱根の夜は更けていった。

翌朝はあいにくのくもり空だったが、近くには湿生花園もあり、緑豊かな高原の朝の散歩は新鮮な空気をいっぱい吸って気持ちが良い。朝食は「箱根ラリック美術館」の中庭でとったが、夏の暑さも和らぎ秋風が心地良い。8月下旬には火山性地



2015年7月号の「県のたより」に掲載された「かながわ旅行券」と「お楽しみクーポン」の記事(神奈川県 県のたより)



芦ノ湖の海賊船乗り場には、比較的乗客がいるが、周辺には観光客が少なかった。撮影：2015年8月27日



強羅発早雲山行のケーブルカーの乗客の半数以上が外国人だった
撮影：2015年8月18日



箱根美術館の最寄りの「公園下駅」で乗降する客はいなかった。美術館の前にも人の姿がなかった。
撮影：2015年8月18日

仲原正治

の

まちある記



1年前の暮れ、入浴したホテルの温泉は透明だった。
撮影：2014年12月25日



透明だった温泉は、2015年7月以降赤く変色した。
撮影：2015年8月27日



夜は近くのフレンチ「LE VIRGULE」で友人たちとの楽しい食事
撮影：2015年8月27日



「箱根ラリック美術館」でとる朝食は、ヘルシーで1300円と値段も手ごろだ。近隣の住民も何人かが訪れていた。
撮影：2015年8月28日

震が減少し、山体の膨張を示す地殻変動も収まりつつあると防災協議会では報告されている。1泊2日の箱根の旅の間、一度も身体に感じる地震はなく、ゆったりとした気持ちの時間を過ごすことができた。

今年の5月に噴火警戒レベル2に引き上げた時点で、神奈川県知事、箱根町長が観光客の減少への影響からか、「一部の限られた区域」の出来事であるということ強調し、「一部の地域以外は安全なので、箱根に来てください」というニュアンスの発言がなされた。この発言に対して、一部ネットなどでバッシングされることもあった。

今回、9月11日に噴火警戒レベル2に引き下げるにあたり、9月14日に箱根町は「観光客の皆様へ」を発表している。そこでは、規制エリアの縮小とともに、観光関係について次のようなメッセージを送っている。

「大涌谷の火山活動は鈍化しつつありますが、現在も継続しております。観光客の皆様におかれましては、町や関係機関からの県連情報に十分に留意していただきながら、紅葉・すすきなど、色づく秋の箱根観光を満喫していただきたいと思います。」噴火活動も少し落ち着いたこともあり、9月の連休には、多くの観光客が箱根を訪れたと聞いた。以前のように噴火警戒レベル1にまで下がり、安心して訪れることができる箱根に戻ってほしい。

このごろ気になるのは、ネット等による誹謗中傷が多いことだ。東日本大震災でも様々な憶測情報や、間違った情報に基づいた「批判」や「風評」が数多く流布されたが、災害時に何かあるとSNS等で発信するケースが多い。意見を述べることは自由だが、根拠が希薄な情報を発信することはやめてほしい。

ほんの小さな日本だが、この国では、大雨や地震・津波、火山の噴火など、有史以来、自然の驚異にさらされ、様々の試練をいつも背負ってきた。昨年は広島で集中豪雨により土砂崩れがあり、今年9月には鬼怒川が氾濫し、多くの犠牲者を出している。世界の温暖化により、地球環境が少しずつ崩れていっているのではないかと思う。

「備えあれば憂いなし」ということわざがある。現代の災害は「備え」をしても、予想を上回る災害に見舞われることが多い。人間はどうやっても自然には勝てないと思うしかない。これに勝とうとするのではなく、自然災害とはうまく折り合いながら、二人三脚で暮らすしかないのだろう。

(注) 9月23日現在、噴火警戒レベル2で、規制区域がありますが、今後変更になることも考えられます。箱根に行くときには事前に箱根町のホームページなどで情報を確認してください。

5) 「赤煉瓦の運命と魅力」

—半田、舞鶴、奈良、横浜、日南市—



2015年に「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に選ばれた「三井炭鉱万田坑」
撮影：2011年12月4日



大阪市中央公会堂（中之島公会堂）は、株取引で儲けた岩本栄之助の寄付（100万円）をもとに建設されたもので、1999年から保存・耐震補強工事を行い、2002年に重要文化財に指定された。岡田信一郎の原案を辰野金吾らが設計している。

撮影：2011年8月20日



福岡県大刀洗町にある今村天主堂（1913年築）は五島列島の教会を数多く設計した鉄川与助の設計で、2015年に重要文化財に指定された。
撮影：2002年11月23日



トルファン市の西約10kmにある、紀元前2世紀ごろに作られた「交河故城」には、日干し煉瓦が使われている。
撮影：2002年11月4日

2014年に富岡製糸場が、2015年には「明治日本の産業革命遺産」がユネスコ世界遺産に登録された。富岡製糸場は木骨煉瓦造、産業革命遺産の三井炭鉱万田坑の建物も煉瓦で造られている。現在、赤煉瓦建造物で国の重要文化財に指定されているものは、北海道庁、東京駅、大阪市中央公会堂、今村天主堂、舞鶴赤煉瓦建造物群など45件余にのぼる。今回は、赤煉瓦建造物が突然壊されるなどした場所や地域住民の力で保存活用された事例などを、半田市と奈良市、横浜市、日南市を辿り、地域の実情を考える。

煉瓦建造物の黎明期

煉瓦の歴史は古い。原料が「土」で、容易に作ることができるため、紀元前（B.C）8千年頃には古代オリエントで土を固め天日干しにした「日干し煉瓦」が作られていた。B.C3千年頃には焼成煉瓦も作られ、古代エジプトやメソポタミアでは日干し煉瓦と一緒に建材として使われてきた。

アジアでは、中国の殷時代（B.C1400年頃）に日干し煉瓦が作られ、B.C400年頃には焼成煉瓦が作られている。中国では煉瓦のことを「塼（せん）」と呼んでいた。日本には紀元500年頃に仏教の伝来とともに塼（せん）の技術が伝えられたが、煉瓦は寺院の基壇部等に使われた例はあるが、建築材としては普及しなかった。

日本で煉瓦が使われだしたのは幕末以降で、1857年（安政4年）に着工した長崎製鉄所（当時は「長崎鑛鉄所」）では、工場敷地内で煉瓦が焼かれている。フランス人技術者ヴェルニーらにより71年に完成した横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）などが、煉瓦建築の初期のものだろう。現在、日本で一番有名な煉瓦建造物「官営富岡製糸場」は、横須賀製鉄所で働いていたオーギュスト・バスチャンが設計し、1872年（明治5）に完成している。

煉瓦建造物を市民が意識し、普及したきっかけは、銀座煉瓦街の建設だろう。東京は江戸時代から火事が多く、多くの町並みが消失してきた。明治になっても1872年（明治5年）2月に銀座、築地一帯を焼いた大火が発生した。政府は不燃都市の建設を目指し、東京市中を不燃化する構想を立て、焼け野原となった銀座一帯を不燃化するため、お雇い外国人のイギリス人ウォートルスに建設を任せた。当時は、煉瓦やセメントの質や職人の不足など技術的な問題が大きく、彼は質の良い煉瓦を焼くために、東京の小菅にホフマン式輪窯を築き、そこで焼いた煉瓦で「銀座煉瓦



7世紀中頃に作られた西安の「大雁塔」では、すでに焼かれた煉瓦が使われている。
撮影：2002年11月8日



世界遺産「官宮富岡製糸場」は木骨煉瓦造の姿が美しいが、約1年半という短い工期で完成させている。
撮影：2014年7月7日



ホフマン輪窯は現在、栃木県野木町と埼玉県深谷市のものが重要文化財。ほかに近江八幡市と舞鶴市神崎に現存する。写真は、再生された舞鶴市神崎のホフマン輪窯（登録有形文化財）
撮影：2013年4月14日



舞鶴市神崎のホフマン輪窯の内部。火を絶やすことなく、一年中、煉瓦を造ることができる。
撮影：2013年4月14日
(舞鶴ホフマン窯写真2枚：馬場英男)

街」の建設を進めた。煉瓦街は歩道と車道を分離し、15間（約27m）に拡幅し、その両側に建造物を建設している。官主体による銀座煉瓦街は74年（明治7年）に一部が完成し入居が始まり、78年に第2次工事を完成させたが、地主の反対や煉瓦建造物に対する暗くて湿っぽいという風評で、空き家が360戸に達したため、翌79年には民間に払い下げることとし、ようやく84年頃に空室を解消している。資生堂名誉会長の福原義春さんは、銀座煉瓦街に資生堂の初代が空き家の斡旋で入居したが、湿気も多く、なんとなく暗い感じで、この場所で店を始めるのかとため息交じりだったと話していた。

関東大震災以降、煉瓦建造物が作られなくなった。

明治の建築家辰野金吾が設計した「東京駅」をはじめとする数々の赤煉瓦の建物は重要文化財や登録有形文化財として全国各地に存在している。そのほとんどは19世紀末から20世紀初頭に造られている。辰野作品には銀行建築が多く、外観は石造りに見えるが、日本銀行本店（1896年築）、大阪支店（1903年築）も煉瓦造だ。また、京都支店（1906年築、現京都文化博物館別館）、第一銀行京都支店（1906年築、現在は取り壊してレプリカ）などもあり、辰野と煉瓦は切っても切れない縁である。当時は、超多忙だったこともあり、出身地の佐賀銀行唐津支店（1912年築）は、弟子の田中実の設計を監修している。辰野・片岡事務所時代には、九州の旧第二十三銀行本店（1913年築、現大分銀行赤レンガ館）や、小ぶりな百三十三銀行八幡支店（1915年築）を設計している。

1891年（明治24年）に岐阜県美濃地方、愛知県尾張地方を中心としたマグニチュード8.0の濃尾大震災で全壊・焼失家屋が約14万戸だったことをきっかけに、明治後期には煉瓦建造物の耐震工法として、碇鉄構法（ていれんてつこうほう）や鉄骨煉瓦造などが普及し始めた。

1923年9月1日、関東地方をマグニチュード7.9の地震が襲った。地震と発生した火事が横浜や東京の下町を縦なめにし、死者10万余人、全潰全焼家屋約30万戸という大被害をもたらせ、銀座煉瓦街も赤煉瓦建造物が地震で倒壊し、その後の火事でほぼ消失している。横浜赤レンガ倉庫は、碇鉄構法を採用していたこともあり、震災時に一号館の一部の損壊はあったが、現在もリニューアルして使われている。関東大震災で煉瓦建造物の多くが被害にあったため、煉瓦造は地震に弱いと思われ、煉瓦建造物が日本各地で敬遠されるようになっていった。現在、煉瓦建造物が数多く残っている地域は、佐世保、呉、舞鶴の3市だが、ここには明治時代に海軍鎮守府が置かれ、海軍施設が煉瓦造で造られたものが多く、戦後は自衛隊や米軍に引き継がれて、壊されずに使われてきたためだ。

仲原正治

の

まちある記



辰野金吾設計の日本銀行大阪支店は石が貼られているが、内側は煉瓦だ。
撮影：2011年 6月 3日



大分銀行赤レンガ館の1階は、実験的に「創造の場」として、商店街やアートの案内所として活用されている。
撮影：2015年 9月 27日



辰野・片岡事務所設計の旧百三銀行八幡支店（1915年築、約209㎡）は、北九州市の「旧百三銀行ギャラリー」として活用されている。
撮影：2010年 2月 20日



煉瓦と煉瓦の間に鉄の板を入れ耐震を高める碇鉄構法（ていれんてつこうぼう）。写真は現存しない「東京商業会議所」（村松貞次郎著『日本近代建築技術史』より）



左：呉市江田島の旧海軍兵学校「水交館」（1883年築）はアーチが美しい。（撮影：1995年 10月 22日）

右：重要文化財に指定された舞鶴赤煉瓦倉庫群（撮影：2015年 3月 29日）

明治の巨匠「妻木頼黄（つまきよりなか）」設計「半田赤レンガ建物」

愛知県半田市に巨大な赤煉瓦建造物があることを知っている人は少ない。1898年（明31年）に丸三麦酒株式会社の本格的なドイツビールの生産工場として建設されたものだ。設計者は横浜赤レンガ倉庫と同じ妻木頼黄（1859-1916）、彼が設計した建物で現在残っているものは東京北区にある醸造試験場（1904年築）、旧横浜正金銀行本店（1904年築）、門司税関（1912年）など、赤煉瓦建造物が多い。

日本のビール会社の発祥地は横浜で、1869年（明治2年）にウィリアム・コープランドが山手地区の湧水を利用して作ったのが最初だ。会社は後日、ジャパンプルワリーに引き継がれ、麒麟麦酒（現在のキリンビール）となっている。北海道では76年に札幌冷製麦酒が作られ、後日「札幌麦酒株式会社（現サッポロビール）」となった。東京では日本麦酒株式会社が87年に創業、エビスビールの銘柄で親しまれていた。大阪では1889年に「大阪麦酒株式会社」が作られ、現在のアサヒビールになっている。この大阪麦酒の吹田醸造所も妻木頼黄が設計している。現在、この建物は壁だけ保存されている。

1906年（明治39年）に札幌麦酒と日本麦酒、大阪麦酒が合併し大日本麦酒株式会社となり、麒麟麦酒と2大勢力となった。カブトビールは1933年（昭和8年）に大日本麦酒に吸収されている。戦後の財閥解体により、大日本麦酒は日本麦酒と朝日麦酒に分かれ、両社はその後サッポロビール、アサヒビールと名称を変え、現在に至っている。サントリービールが参入したのは1964年（昭和39年）からだ。

カブトビールの工場は、第2次世界大戦時は中島飛行機製作所の衣糧倉庫として使われ、戦後は日本食品化工株式会社に所有が移り、コーンスターチ工場として使われてきた。1994年に工場を閉鎖、日本食品化工は建物と敷地を売却するため、更地にして売却しようと考え、一部を壊し始めようとした。その情報を聞いて、1994年8月に赤煉瓦ネットワークが視察に出かけている。半田市に知り合いはいなかつ

仲原正治

の

まちある記



門司税関（1912年築 設計：妻木頼黄）の裏には、黒川紀章設計の超高層住宅が建てられ、景観論争が起こった。撮影：2013年11月16日



門司駅前にある、旧サッポロビール北九州工場（1913年築 設計者不詳）は、帝国麦酒（後に桜麦酒と名称変更）時代に作られ、現在は「門司赤煉瓦倶楽部プレイス」として活用されている。撮影：2013年11月16日



日本食品化工株式会社所有時代の「半田赤レンガ建物」は煉瓦以外の建物が増築されていた。撮影：1994年8月



改築後の「半田赤レンガ建物」の奥側から見た建物の壁には、現在も銃弾の跡がくっきりと残っている。撮影：2015年7月19日

たが、舞鶴建築探偵団の馬場英男氏の弟の馬場信雄氏が半田に本社がある中埜酒造の総務部長をしていると聞き、さっそく、見学の仲介をお願いした。当時、馬場信雄氏は中埜酒造創立150周年事業もあり、多忙な中、兄からの要請に応えるべく半田市役所に伝手を求め見学会を実施した。

当時の竹内弘半田市長は、建物は地域だけではなく、日本の財産だと思い、95年に敷地と建物を購入する方針を固め、約40億2千万円の補正予算案を市議会に提案した。しかし、高価すぎるということで12:14という僅差で補正予算案が否決されてしまった。その後、市民から赤レンガ建物の保存を求める声が高くなり、96年には地元有志が保存のためのシンポジウムを開催し、工場がいかに歴史的に素晴らしいかを、市民に伝えている。その年に市は所有者の日本食品化工と交渉し、買取価格を約7億円下げ、33億4千万円余の予算案を提案し可決した。取得に対しては反対派も多く、赤レンガの保存活用を巡っては、政争にまで発展した。

「赤煉瓦倶楽部半田」の活動と「半田赤レンガ建物」

建物取得までの多難な経過を踏まえ、保存活用を市民から応援するために、1997年「赤煉瓦倶楽部半田」が誕生している。倶楽部では5年後の2002年に建物を初公開、その後13年までの12年間にわたり、倶楽部が中心となり、公開やシンポジウムなどを実施するとともに「カプトビール」の復刻版を発売するなど、保存活用の運動を続けてきた。一方、半田市は、購入した赤煉瓦工場とその敷地を維持していくために、敷地の一部を「住宅展示場」としてハウジングメーカーに年間7000万円ほどで貸し付け、その賃料で敷地管理などをしてきた。



左：増築部分が取り壊され、改築前の「半田赤レンガ建物」（撮影：2003年8月23日）

右：改築された「半田赤レンガ建物」の外観は以前とほぼ変わっていない。現存部分は延床面積約5,000㎡。（撮影：2015年7月19日）

2005年に国の登録有形文化財に登録、2009年に近代化産業遺産に指定されるなど、保存活用の道筋をつけ、13年に指定管理者を公募、14年3月に指定管理者として

仲原正治

の

まちある記

株式会社 JTB プロモーションを指定した。指定管理費は 7,300 万円で、その大部分は住宅展示場の賃貸料で賄うことができるようになっている。

工事は 14 年 7 月に着工し、15 年 7 月 18 日にリニューアルオープンした。敷地は約 1 万坪で、そのうちの約半分が「半田赤レンガ建物」の利用区域で、現在の利用は建物の 1 階部分(約 2,787 m²)だけだが、将来的には 2 階から上の階も活用する予定となっている。改修費は約 21 億円、周辺整備費に 4 億円、そのうち、国のまちづくり交付金(社会資本整備)が 9 億円となっている。

半田赤レンガ建物は「集う」「楽しむ」「繋がる」「紡ぐ」「広げる」「深める」の 6 つの役割を持ち、知多半島固有の歴史と浪漫が育んだ半田エリアの活性化と次代の交流拠点として、カフェやショップの営業、ホールや広場等を活用したイベントなどを実施して、全国からの集客を目指している。ビールフェスタや毎月第 4 日曜日には、地域の物産を中心にマルシェを開催している。

赤煉瓦倶楽部半田は任意団体で、施設運営のノウハウを持たなかったため、指定管理者応募には参加しなかった。しかし、14 年 12 月に一般社団法人として組織を固め、保存活用の運動をますます高めていくことにした。一般社団法人にした理由は、市民レベルで赤煉瓦倶楽部半田を継続させ、半田赤レンガ建物の応援団となるとともに、運営者や市に対しても緊張感を持たせていくことを狙っている。

オープニングの期間に「半田赤レンガ建物」を訪ねたが、初日には 8,000 人を超える来客があり、要所に「赤煉瓦倶楽部半田」のメンバーがいて、建物の歴史や由来の説明をしていた。復刻カフトビールは知多麦酒が製造しているが、今回のオープンに際して設備投資をしてより多くのビールを供給できるようにしている。



半田赤レンガ建物の特徴を記した看板
撮影：2015 年 7 月 19 日



きれいに整備された建物内の通路
撮影：2015 年 7 月 19 日



改築前のイベントでは室内を利用して、地元のアート作品の展示などが行われていた。
撮影：2003 年 8 月 23 日



改築の際に、室内はあまり変更を加えずに、なるべく以前の姿をそのまま保存して活用している。
撮影：2015 年 7 月 19 日



左：復刻した「カフトビール」の由来などを記載した看板。ビールは 1 本 600 円で、売上げ 1 本につき 50 円が赤煉瓦倶楽部半田に入る仕組みだ。(撮影：2015 年 7 月 19 日)

右：広場でのイベントでカフトビールで乾杯する赤煉瓦倶楽部半田の理事長馬場信雄氏と理

仲原正治

の

まちある記

事の左右木星志氏。(撮影：2015年7月19日)

「赤煉瓦ネットワーク」の誕生と役割

1991年10月12日、横浜で「赤煉瓦ネットワーク」が産声を上げた。横浜市と舞鶴市職員が中心で、顧問には村松貞次郎氏（1924-97）と田村明氏（1926-2010）、アドバイザーに元祖建築探偵団の藤森照信氏、堀勇良氏、煉瓦博士水野信太郎氏などを迎えての出発だった。当時は、バブル経済の末期で、日本全国で、住宅やオフィス開発で様々な歴史的建造物が壊されていた時代だ。

設立のきっかけは、横浜まちづくり研究会（「横浜まち研」1981年発足）と舞鶴市まちづくり推進調査研究会（「舞鶴まち研」1988年発足）の交流から始まっている。馬場英男氏を中心とした舞鶴まち研のメンバーから横浜まち研に、月刊「地方自治職員研修」の記事を読んで、1989年3月9日～11日にぜひとも話を聞きたいとのリクエストが届いた。筆者は3月25日から開催される「横浜博覧会」のFM放送「YES FM」の準備で忙殺されていたが、横浜まち研有志で横浜の街を案内し、横浜赤レンガ倉庫の前では「この建物を横浜の象徴的な資産として活用していく」と話した。舞鶴まち研メンバーからは「こんな建物なら舞鶴にはなんぼでもある。市役所の倉庫もそうだし、珍しくもない」との発言。当時の舞鶴市は「母は来ました 今日も来た この岸壁に 今日も来た・・・」（作詞：藤田まさと 作曲：平川浪竜）という歌が象徴する「引き揚げの町」として有名で、訪れる人も少なくなっていた。

舞鶴まち研のメンバーは、横浜の活動に触発されて、町の魅力づくりを煉瓦で進めたいと考え、「舞鶴建築探偵団」を結成し、次々に舞鶴の赤煉瓦建造物を調査し、発掘していった。1990年11月には舞鶴建築探偵団主催でシンポジウムが開催され、北は北海道から南は九州まで200名近い参加者が集まった。開催当日、当時の町井正登市長が全国からこんなに關心を持って来てくれたことを知り、煉瓦建造物を活用していくことを宣言している。その後、建築探偵団のメンバーは「赤煉瓦倶楽部舞鶴」を結成し、シンポジウムの開催や山下洋輔氏を招いて、赤煉瓦倉庫の建物間でジャズコンサートなどを実行し、赤煉瓦の魅力を市民や行政に訴えかけた。

舞鶴市は、全国でも数少ない集積された赤煉瓦建造物群を活用していく方針を固め、「舞鶴赤れんが博物館（1993年11月開館）」をはじめとして、「市政記念館（1994年10月開館）」、「まいづる智恵蔵（2007年4月開館）」など次々に建物の活用を進めていった。赤煉瓦倶楽部舞鶴の活動は全国に伝わり、歴史的建造物活用のモデルケースとして、「まちづくり功労賞国土交通大臣表彰」や「ティファニー財団賞伝統文化振興賞」など数々の賞を受賞している。残念なのは、活動の中心人物の一人森口清滋氏が2015年3月に57歳で亡くなってしまったことだ。2008年に、舞鶴赤煉瓦



横浜まち研と舞鶴まち研との合同による舞鶴市神崎のホフマン輪窯の調査
写真：赤煉瓦ネットワーク
撮影：1990年7月7日



世界でも珍しい煉瓦を主題にした「舞鶴赤れんが博物館」は鉄骨煉瓦造で、1903年海軍兵器廠魚形水雷庫として建設されたもの
撮影：2015年3月29日



舞鶴赤煉瓦倉庫群で行われた舞鶴ジャズライブ、山下洋輔トリオ リハーサル風景
撮影：1991年8月3日



保存活用されている市政記念館（左側）と「まいづる智恵蔵」
撮影：2015年3月29日

倉庫群の旧鎮守府倉庫施設7棟附1棟が国の重要文化財に指定されている。

赤煉瓦ネットワークの活動の目的は、赤煉瓦で作られた日本全国の建物・施設の保存・活用を中心に、地域にねざした「個性的なまちづくり」を行う組織や運動体のネットワークを形成し、交流を行うことだ。一時期には、全国50団体、2000人規模の会員を抱え、年4回機関誌「輪環」を発行していた。「輪環」の名前の由来は、ドイツのホフマンが考案した輪状の連続稼働が可能な窯（ホフマン輪窯・通称：輪環窯）からで、人々の輪により「赤煉瓦の保存・活用」を中心に地域の歴史と文化を活かした「まちづくり」の火を絶やさずに燃やし続けたいという願いからきている。

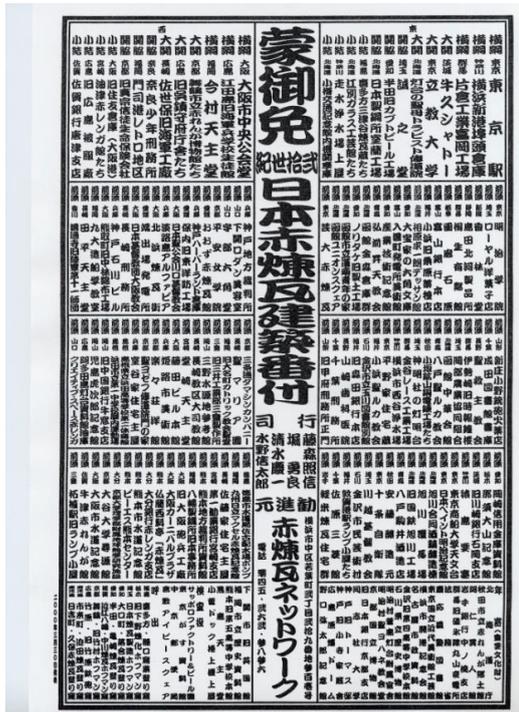
現在、赤煉瓦ネットワークはSNS等を活用した活動に切り替えている最中で、煉瓦を愛する人ならば誰でも参加できる。現在の活動は、年1回の全国大会や、全国の煉瓦建造物保存活用のアドバイスや現地視察、全国への広報活動などが中心に行
2015年の「赤煉瓦ネットワーク」の全国大会は京都府舞鶴市で11月14日（土）、15日（日）に開催される。大会事務局まで連絡いただければ誰でもが参加できる。



筆者もパネラーで参加した1990年に行われた舞鶴での最初のシンポジウム。これが舞鶴の煉瓦建造物の保存活用のきっかけとなった。写真：赤煉瓦ネットワーク 撮影：1990年11月25日



福岡市で開催された2014年度の赤煉瓦ネットワークの全国大会の懇親会。写真：赤煉瓦ネットワーク 撮影：2014年11月8日

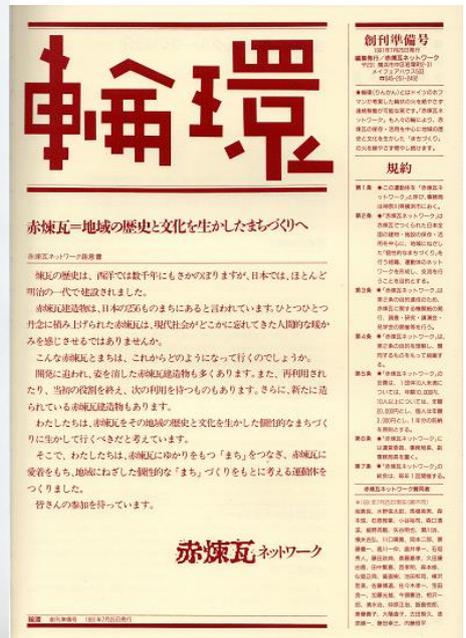


左：藤森照信氏ほか3名が行司となって発行した「日本赤煉瓦建造物番付」。重要文化財は「年寄」として扱っている。

右：1991年7月25日発行の赤煉瓦ネットワーク機関誌「輪環」創刊準備号表紙。

★赤煉瓦ネットワークフェイスブック：

https://www.facebook.com/akrng/?ref=aymt_homepage_panel



壊される赤煉瓦たちー明治の五大監獄ほか

明治時代に作られた煉瓦建造物は、関東大震災や第2次世界大戦の空襲等でほとんどが壊されて残っているものが少ない。そうした中で、明治の五大監獄と言われた煉瓦建造物がある。長崎（1907年築）、千葉（1907年築）、金沢（1907年築）、鹿児島（1908年築）、奈良監獄（1908年築）の5つの監獄だ。そのすべての設計に携わったのが明治の建築家山下啓次郎だ。

五大監獄の内、千葉監獄の一部の建物（現千葉刑務所）と奈良監獄（現奈良少年刑務所）は現存しているが、長崎、鹿児島、は正門などを一部保存、金沢は壊され残っていない。

奈良少年刑務所は、築100年以上を経過していることもあり、老朽化などから、法務省矯正局大阪矯正管区では、施設の移転候補地の調査を行っている。そのため、市民の間では、近い将来に壊されるのではという危惧を抱き、煉瓦建物とその歴史を後世に伝えようと、自治会や建築家、研究者、宗教者などの呼びかけで、2014年10月に「近代の名建築 奈良少年刑務所を宝に思う会」が結成された。会長は設計者山下啓次郎の孫でジャズピアニストの山下洋輔氏。彼らは署名活動や研究会を開催する中で、奈良少年刑務所の「重要文化財」指定を目指している。

重要文化財に指定されると、現状を変更する行為は「維持の措置」と「非常災害のための応急措置」以外は、すべてあらかじめ許可を必要とするため、大規模な災害で建物が崩壊しない限り、半永久的に建物は保存されることになる。日本各地で近代化資産が老朽化や経済効率を理由に壊されてきたが、日本の近代化の監獄史の生き証人である建物を後世に残すことは非常に大切なことだ。



千葉刑務所の構内は撮影禁止のため、道路から撮影している。年1回、矯正展の際に一般公開される。
撮影：2015年10月6日



奈良少年刑務所の門は、千葉刑務所とほぼ同じようなゴチック様式で、白い石と煉瓦を組み合わせた姿が美しい。
撮影：2017年7月15日



奈良刑務所の本館は鉄製の門扉越しに見ることが出来る。正面入り口から入ると獄舎に繋がっている。
撮影：2017年7月15日

右：奈良少年刑務所の全景
J-heritage HPより



仲原正治

の

まちある記

奈良少年刑務所は、2016年10月に、旧奈良監獄19棟が重要文化財に指定されている。また、活用方法としては、公募を行い、ホテル事業を中心とした事業を進めることになった。あまり、近代的にしすぎずに、昔の雰囲気監獄に泊まることができる稀有なホテルになってほしいものだ。



監獄の扉は厳重で、ここからモノを差し入れる小さな窓がある。
撮影：2017年7月15日



左：放射状に監獄が並んでいる。(撮影：2017年7月15日)
右：廊下の左右に監獄がある。(撮影：2017年7月15日)



左：四畳半弱の監獄にはトイレ、洗面台があった。(撮影：2017年7月15日)



右：受刑者たちの実習場が何か所かある。(撮影：2017年7月15日)



取り壊し前の旧日東倉庫も表面はタイルで覆われているが煉瓦造だ(左側の真ん中の建物)、
撮影：2014年10月31日



取り壊され時間貸し駐車場となった敷地
撮影：2015年3月18日

横浜では、2015年2月に明治時代に作られた貴重な倉庫が取り壊された。日本大通に面した三井物産横浜ビルと一体となった「旧日東倉庫」だ。外見は白いタイルで覆われているが煉瓦造で、明治時代のオフィスビルと保税倉庫が対で残っている建築物は貴重だ。旧日東倉庫は、横浜赤レンガ倉庫2号館(1911年築)よりも1年早い1910年(明治43年)に造られている。翌年、日本最初の鉄筋コンクリート造のオフィスビル三井物産横浜ビルができ、二つの建物は横浜の貿易の生き証人であり、二つが一体となって商社機能を果たしていた。

横浜市は二つの建物について、市の文化財指定を再三再四働きかけてきたが、所有

仲原正治

の

まちある記

していた企業は、文化財になると壊したり、改築したりすることが難しくなると考え、文化財指定を見送ってきた。そして、突然にマンション業者に所有権を移転させてしまった。

購入したマンション業者が 2014 年に「倉庫の解体」を表明したため、まちづくりの団体や横浜を愛する建築家、市民などが、所有者に対して解体中止の要請文を送ったが、何ら説明することなく、新しい建築計画がないにも関わらず、今年 2 月に解体して、時間貸し駐車場にしてしまった。

一企業の経済的利益や私的所有権の前では、「まちの財産」を守ることができない現状は、今後のまちづくりにとっては危機的なことだ。歴史的建造物の保存活用こそが町の魅力や個性づくりだということを踏まえ、所有者が拒否しても文化財に指定できるなど、私的所有権の制限の導入など制度的に考える必要があるのではないだろうか。

大切なものは、使わないから壊すのではなく、使わなくても壊さずに次の世代につなげていく。そうすると、いつかは使うための努力を惜しまない人たちがあられ、活き活きとしたものになってくるはずだ。



日南市油津にある煉瓦倉庫は購入した当時は、相当痛んでいた
撮影：1998年1月17日



2010年にリニューアルオープンした「油津赤レンガ館」は新たに開放感のある入り口を造っている。
写真：宮崎県日南市提供
撮影：2014年11月1日



「油津赤レンガ館」の内部は、アーチ状の入り口が美しい。
写真：宮崎県日南市提供
撮影：2014年11月1日

赤煉瓦を保存活用する意義を「日南市油津」の事例から考える

宮崎県日南市油津地区は、江戸時代に堀川運河が造られ、油津港は飫肥杉（おびすぎ）の集積地として、明治以降はマグロ漁業の基地として栄えた。戦後、飫肥杉の需要の減少などにより、運河周辺の土地が空き地化し、新たな活用のため 1976 年に堀川運河の埋め立てが決定された。堀川運河の支線が埋め立てられ始めると、88 年に地元市民が「堀川運河を考える会」を結成し、歴史を見直す祭りの開催や守る活動を進めた。県は 93 年に運輸省の「歴史的港湾環境創造事業」の指定を受け、堀川運河の本体整備を決定。同年正月の映画「男はつらいよ 寅次郎の青春」では堀川運河が重要なロケ地としてクローズアップされた。

こうした活動の中で、1997 年に油津再生の中核施設として考えられていた民間所有の「赤煉瓦倉庫」（1922 年築、2 階建て、延床面積約 390 m²）が競売にかけられそうになった。これを知った市民が、市に取得してほしい旨を訴えたが、市からは財政難で取得は無理と言われてきた。しかし、赤レンガ建物は油津のシンボルであり、どうしても残したいと、地元の有志が一人百万円の出資者を募って買うことにした。発起人のメンバーは

「堀川に 100 万円を捨てるつもりで出資をしてほしい」と有志に訴えかけ、31 名の出資者で「合名会社油津赤レンガ館」を設立、約 3,000 万円で建物を取得している。彼らは出資に当たり、各自がローンを組んで毎月 1 万 5000 円の返済を行い、途中、亡くなったメンバーは遺族がローンを引継ぎ、7 年かけてローンを返済した。この

仲原正治

の

まちある記

合名会社は建物を保存するためだけの目的で設立したため、それ以外のお金がかかるような事業は行わず、自主的にミニコンサートや堀川灯籠流しなどのイベントを仕掛け、ローン完済後の2004年に日南市に建物を寄付して、会社を解散している。建物は98年に国の登録有形文化財に指定され、市の所有になった後は、2009年に耐震補強などの補修工事を行い、2010年に「油津赤レンガ館」としてオープンし、14年に2階部分を自由な働き方を実現できるコワーキングスペースとしている。14年には「自治体学会賞田村明まちづくり賞」を受賞した。

筆者も、1998年に初めて油津を訪ね、彼らの活動を知り、2006年には赤煉瓦ネットワークが年1回の総会を日南市油津で開催した。訪ねるたびに、地元の有志の熱意やまちへの思い入れ、ふるさとを大切に思う心の熱意が伝わってきた。自分たちで借金をしてまでも、建物を残そうとした、その心意気が素晴らしい。

なぜ、赤煉瓦建造物を見ると懐かしく感じ、残していきたいと思うのだろうか。元東大教授で明治村館長も歴任した村松貞次郎氏は、赤煉瓦ネットワーク機関誌「輪環」創刊号でこう書いている。

「赤煉瓦は明治の象徴。わずか100年余ですっかり日本のものになってしまった。その赤と、緑や黄の日本の四季の色彩とがうまくマッチしていることもあろう。……そして、何より親近感を覚えるのは、手仕事の成果。1個ずつ積み上げた先人たちの手の痕が、あたたかく、ときに厳しく私たちに語りかけるものがあるからだろう。だから視線もとまる。ツルツルの新建材の機械化施工ではこうはいかない。」

一枚一枚積み上げていく作業をして、はじめて赤煉瓦の建物は造られていく。そこには、現在の近代化された建物の建設とは違った「ぬくもり」や「人の息遣い」が感じられる。経済効率や利益優先の現代社会では得られない「人間的な営み」「人と人との触れ合い」など、社会で本当に必要なものが赤煉瓦には感じられるから、人はこれを残して次の世代に伝えようとするのではないだろうか。

仲原正治

の

まちある記

「中心市街地&被災地」で見えてくるもの(最終回)

「仲原正治のまちある記」を連載して、4年9カ月が経過した。5年前の12月頃に編集者から依頼があり、最初の原稿を準備している最中、突然、東日本大震災に遭遇した。そのため、最初の原稿は震災関連に変わった。いわき市に家があるため、何回も被災地に行き、「今」を伝えることが「まちある記」の役割と考え、連載62回のうち被災地関連は全体の1/4近い回数を掲載した。また、ほとんどの記事で中心市街地の活性化について記述している。これは、政府が進める「地方創生」とは異なって、「国」の力をあまり借りずに、自治体や市民が中心となって、様々な工夫で、地域の再生を進めている場所の事例から、今後の地域再生のヒントを見つけ出そうとする試みだった。今回、連載を終えるに当たり、地方の活性化と被災地の現在の課題と展望について、総括的に述べてみたい。



釜山駅海側は埋立が進み、新しい開発が進んでいる。
撮影：2015年11月21日



ダウンタウンにあった釜山市役所は移転し、跡地にはロッテモールができています。
撮影：2015年11月21日



甘川洞(ガムテュンドム)文化村は一大観光地として、中国人や日本人など多くの観光客が訪れている。
撮影：2015年11月21日



斜面に張り付いた家屋の外装は様々に彩られ、迷路のようになっている。アーティストの滞在するスタジオなどもある。
撮影：2015年11月21日

釜山で見た中心市街地の活性化策

2015年11月下旬、韓国・釜山を訪ねた。釜山広域市は農村からの流入が激しく、1994年には400万人を超える人口になり、その後、ソウルへの一極集中の進行や外資系工場などの中国移転などで10年間に約50万人減少し、2010年には約340万人となっている。一方、上海やシンガポールなどに次いで世界5位のコンテナ取扱数を誇る貿易港であり、東アジアのハブ港としての地位は揺るがない。市内では港周辺で大きな規模の開発が進行しているが、旧市街地(ダウンタウン)は、近隣にあった釜山市役所の移転で空洞化しはじめ、空室が増え家賃が下がるという典型的な衰退傾向を示し始めた。市はこの空洞化を食い止めるため、「文化芸術」を中心とした施策を取り始めている。

釜山市が助成金を出しているNPO的な団体「トタトガ」が2009年から始めたプロジェクトは、空きオフィスを借り、そこにアーティストやデザイナーなどを滞在・制作させる場の創出だった。「トタトガ」の目標は、多様なジャンルがミックスした都心型創作空間創造を通し、市民とのコミュニケーションの場として文化芸術教育プログラムを開発し、活動を通じて地域を活性化していくことだ。

アーティストの範囲は美術だけではなく、音楽、映画、文学、舞台芸術などあらゆる芸術分野にわたっている。選ばれたアーティストは3年間無償でスタジオ等を使用でき、その見返りとして、地域で芸術を教えることや、地域と一緒に活動することを義務付けられている。入居倍率は4倍を超える狭き門となっている。3年を超える場合は、審査で6年までは入居を継続できるが、その場合は家賃の50%を負担することになる。「トタトガ」の施設のいくつかを見たが、50㎡程度の場所をシェ

仲原正治

の

まちある記



旧中心市街地の交差点に設置された「トタトガ」の拠点を表示した案内図。
撮影：2015年11月21日



「トタトガ」の事務局でキム・フェジンさん及びチャ・ジェグンさん（元京畿道文化財団文化芸術本部長）から説明を受ける筆者たち。
撮影：2015年11月21日



「トタトガ」の管理するギャラリーの入り口、内部では写真展が行われていた。
撮影：2015年11月21日



「トタトガ」に部屋を借りているアーティストのスタジオ。
撮影：2015年11月21日

アする団体や個人が積極的な活動を通じて、地域との連携を図っていることが伺える。

現在、74の拠点を「トタトガ」が民間から借り上げ、アーティスト個人や団体に転貸しているが、その財源はすべて釜山市が提供している。横浜市が進めている「芸術不動産」事業との共通点も多いが、芸術不動産は、アーティスト個人がオーナーと直接契約するため、自分で改装などを必要があるが、「トタトガ」の施設は改装されていて、長期滞在型の「アーティスト イン レジデンス」事業になっている。「トタトガ」は横浜の「BankART1929」や福岡の芸術団体とのつながりも深く、「WATAGATA arts Festival」の開催など、日本の文化芸術団体との交流を進めている。

2009年から始まったプロジェクトで、まだ7年目なので評価が難しいところだが、昨年、「地域文化賞」をもらったことにより、現在使っている拠点周辺の地価が少し上がっていると運営支援センター長のキム・フェジンさんが話していた。

アートによるまちづくりと文化力

日本では、各地でトリエンナーレなどの芸術祭が活発に開催されている。大地の芸術祭、瀬戸内芸術祭、中之条ビエンナーレのように、農漁村の地域で広範囲に作品を設置しアートツーリズムとしての要素を濃くしているものと横浜トリエンナーレや愛知トリエンナーレのように都市の空間を活用しているものの二つに分けられる。後者は福岡、札幌、京都でも行われ、来年はさいたま市でも開催される。なぜ、こんなに様々な場所で開催されるのだろうか。

共通していることは「アート」を題材にして、まちやムラの活性化を狙っていることだ。農漁村型の瀬戸内国際芸術祭のように、地域に雇用を生み出し、地域の活性化の一翼を担う成功例もでてきている。総合プロデューサーの福武総一郎氏は、「瀬戸内芸術祭は日本の原風景のなかで、現代アートを通して、地域のお年寄りが元気になり、みんなが地域のために動き、地域が活性化することを目指している」という趣旨のことを語っている。過疎化を逆手に取り、地域が気づかない魅力をアーティストが発掘し、地域に若者を定着させる動きや、地域の高齢者が生き生きと活動し、よそ者と一緒に新しいコミュニティを形成する姿を実現しようとしている。こうした成功例を見て、自治体は芸術祭を行う動機づけとしているのではないだろうか。

一方、都市型の芸術祭は、社会や地域の課題解決というよりも、純粋に「アート」を見せるものも多く、規模が少し大きくなった美術館での現代アートの展覧会のようなものになってしまう恐れもある。また、入場者数のカウントの仕方もずさんで、「地域に開いた」「地域と協働で」という考え方が少なく、地域貢献や地域活性に

仲原正治

の

まちある記



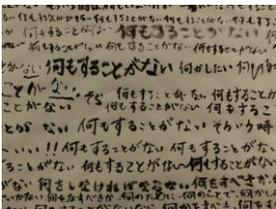
「水と土の芸術祭 2015（新潟）」は広大な潟をテーマに芸術祭が行われた。作品は「ドットアーキテクイツ（家成俊勝+赤代武志+土井亘）の『潟の浮橋』」
撮影：2015年7月17日



瀬戸内国際芸術祭の開催地のひとつ「犬島」の明治時代に作られた旧精錬所
撮影：2008年4月25日



「愛知トリエンナーレ 2013」のテーマは「揺れる大地」。東日本大震災を意識した作品が多かった。作品はヤノベケンジ「サン・チャイルド」
撮影：2013年9月8日



ヨコハマトリエンナーレ 2014/サポーター企画として行われた写経ワークショップ記録より
撮影：2014年10月28日

つながらない事例も見受けられる。

先駆けとなった大地の芸術祭が始まって 15 年経過し、どこの芸術祭も同じような作家の作品が展示されている現状や地域との結びつきについての検証など、そろそろ芸術祭のあり方を見直す時期に来ているのではないだろうか。

自治体での芸術祭の開催が続いている中で、国の文化予算は、先進国の中では非常に低いレベルとなっている。2015 年 3 月に発表された「諸外国の文化予算に関する調査報告書」（野村総合研究所）では、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカ、中国、韓国、日本の 7 か国の比較調査を行っているが、日本の文化予算額は 1038 億円で 7 か国中最下位だ。また、国家予算に占める割合は 0.11% で、韓国（0.99% 2653 億円）、フランス（0.87% 4640 億円）に比べ非常に低く 6 番目となっている。過去 8 年間の伸び率も韓国 10.2%、中国 9.0% に対して日本は 0.3% と、韓国、中国に大きく引き離されている。

国や都市の魅力、国力や都市力が高いと言われるのは何が要因となっているのだろうか。軍事力、経済力などの物理的な力が要因だろうか。アメリカは世界一の軍事、経済力を持っているが、アメリカにはもうひとつ圧倒的に強い分野、文化芸術がある。20 世紀前半まではフランスやイギリスなどヨーロッパが文化芸術の中心だったが、1960 年代以降は、アメリカに芸術の中心が移っている。ニューヨークに行けば、ブロードウェイがあり、メトロポリタン、グッゲンハイム、近代美術館（MOMA）など多くの美術館があり、世界中から、アーティストや観光客が集まってくる。ソビエト連邦時代のロシアは軍事力や経済力はあったが、文化芸術に関しては開放的でなく、訪れる人も少なかった。軍事力や経済力だけの国ならば、たぶんだれもアメリカには行かない。アメリカの文化予算は、2015 年度は 1673 億円（国家予算の 0.04%）と多くないが、民間がその分を補っているため、民間が文化力を高めていると言えよう。

日本の場合、現在、多くの外国人観光客が訪れてきている。円安の進行があり、モノの品質の良さなどで「買い物」目当てが多く、銀座の目抜き通りには大型バスが違法駐車し、中国人を中心とした「爆買いツアー客」がひしめいている。しかし、円高に戻れば、たぶん、外国人は少なくなってしまうだろう。中国経済がクシャミをすれば、日本は風邪をひくという状態が現在だろう。一方、外国人の中には日本文化を堪能したいという旅行者も多く、京都に滞在してマンガの研究や伝統芸能などの日本文化を体験したり、瀬戸内の芸術祭を訪ねたりと幅広い日本の魅力を楽しんでいる。

芸術は自由な発想、自由な表現力を持つからこそ、人々に感動を与え、心を豊かにしてくれるものなので、これが豊かな都市や国は、人々を感動させる要素を持っている。文化芸術は自由だからこそ、政治や経済とはまったく異なった要素を持ち、



銀座の通りに止められている「爆買いツアー」のバス
撮影：2015年5月13日



京都国際マンガミュージアムには多くの外国人が訪れている。
撮影：2009年8月22日



多くの外国人ツアー客が訪れる瀬戸内国際芸術祭。写真は
大岩オスカル作「大岩山」
撮影：2010年7月20日

基本的には国からの束縛はないし、国境は存在しない。文化芸術の世界ではだれでもが、何かを一緒に共有し、感動することができる。文化芸術の盛んな都市には「品格」がおのずと備わってきて、それが魅力を産み、多くの人を引き寄せるのではないだろうか。

地方創生と中心市街地の活性化

日本でも各地で中心市街地の疲弊や空洞化が叫ばれて久しい。国は、中心市街地活性化法をつくり、地方創生大臣のポストまで創設して、地方の危機を解消しようと考えている。しかし、今の日本の現状は企業や情報、学校などが東京・大阪圏に集中し、就業するためには大都会でなければという社会構造を変えていかない限り、地方創生事業を進めても、一時的な効果をもたらすだけであろう。人口減少、少子高齢化の課題と中心市街地の疲弊の根は同じだ。就業機会が地方にない現状では、若い人は大学から東京・大阪圏へ行き、そこに定着してしまう。残った高齢者は、年金生活か農業や漁業などの第一次産業を身体が続く限り行うか、やめてしまうかになる。TPPなどによる農作物の関税撤廃が進めば進むほど、やめてしまうことが予想される。

全国の自治体は仕事の間を作るために企業誘致を推し進めている。企業誘致が成功しても、何年か後には、会社の存続が危うくなり、撤退や人件費や設備投資が少ない東南アジアに移転してしまうことも多い。ほかの場所から何かを持ってきて、就業の間を作ることの危うさは、いろいろな地方でもう経験済みのはずだ。

それよりも今の地域で何かを生み出していくという内発的な動きを作っていくことが必要だ。1980年に大分県の平松守彦知事が提唱して始まった「一村一品」運動は、地域の内発的な力で活性化を図ろうとしたもので、農村の「意識改革」につながった。現在は日本のみならず、タイやベトナムなど都市化が急激に進む東南アジアでもこの考え方に基つき様々な実践がされている。クマモンなどの「ゆるキャラ」の人気をあてにするのではなく、無農薬の作物や郷土料理、歴史的な積み重ねがある特産物など、地道に地域の魅力を発掘して「日本文化」の魅力を作っていくべきではないだろうか。

政府は、「一億総活躍社会」を進めるため、「希望を生み出す強い経済」、「夢をつむぐ子育て支援」、「安心につながる社会保障」の「新・三本の矢」を打ち出しているが、何を現実させたいのか国民の理解は深まっていない。低所得者に3万円給付するというような福祉政策やプレミアム商品券を配ったりするようなバラマキ行政は選挙対策でしかなく、一時的なものを生み出してもすぐに基に戻るだけで、意味がない。経済的な発展こそが「正しい」という価値観が社会で蔓延している限り、今の状況は変わらない。経済成長は無限ではない。必ず近い将来、日本は行き詰る。

仲原正治

の

まちある記

人口も減少し、経済的な縮退が東京オリンピック・パラリンピック以降は必ず訪れるはずだ。

新しい施設の建設は、ある程度は必要だが、今あるものを、うまく活用していくことを最初に行うべきことだろう。不動産は不動なものなので、遊休化した不動産をうまく活用していくこと。そこに若い感性、創造的な力を入れて、高齢者と若者が一緒に舞台で何かを行い、高齢者のノウハウを蓄積すること。仕事の場と暮らしの場がうまく調和する空間、時間作りを進めていくことが、地域の活性化の鍵になるのではないだろうか。一村一品の思想と遊休不動産の有効活用、これを進めることが地域の活性化の第一歩ではないだろうか。



企業誘致のためには、固定資産税の軽減や補助金など様々なインセンティブを企業に与えることになる。
撮影：2012年4月23日



別府市にある「トキワ別府店」には一村一品の表示があるが、大分県では最近はまだあまり一村一品を宣伝していないように感じる。
撮影：2015年9月27日



旧明倫小学校をリノベーションした「京都芸術センター」は地域と密接な関係を持ちながら運営されている。
撮影：2015年3月6日



常磐線木戸駅(龍田駅のひとつ手前)では、10数人の乗客が乗ったが、ほとんどが工事関係者だ。
撮影：2015年12月5日

福島で考える原子力発電所の将来

2011年3月11日。生涯で忘れられない出来事、東日本大震災が起こった。翌12日には「福島第一原子力発電所」の崩壊のニュースが飛び込んだ。それからの福島は「風評被害」に悩まされたが、一概には風評とは言えない様々な出来事が起きていった。直接的に放射能被害を受けた大熊町周辺の住民は全員避難することになり、町はゴーストタウン化していった。福島県では、当初、放射能被害による農作物の出荷停止や漁業の禁止を行い、農家は作物を作らざることをためらった。それでもいつものように田植えをする農家もあり、複雑な時期だった。

約5年以上の歳月を経た現在でも原発は収束されたという状態にはなっておらず、汚染水はタンクに溜められ、そのタンクの数が増え続けている。汚染水が海に流れ出たりすることもあり、漁業関係の調査船はでていますが今でも水揚げされた地元の魚はあまり市場には出回らない。また、「除染」が終わり、帰還ができると政府が言っている場所でも、すでに移転先で就業している人や学校に通っている子供たちの大半が帰郷しない状態は続いている。森や林は除染できないため、山の恵みである山菜などは売られていない状況で、雨や風が吹くと放射能が拡散することになり、本当に安全かは誰も判断できないのが現状だ。

帰還困難地域には一時的に許可を得て入居することはできるが、それ以外は今でも入れない。時間が経ち仮設住宅も劣化し、災害復興住宅に入居が始まっているが、地域のコミュニティはズタズタにされたままだ。

2015年12月に福島県、富岡町、楡葉町は福島県内で発生した放射性廃棄物を富岡町の最終処分場に埋め立てる国の計画について同意した。少なくとも30年間は、この地域は立ち入りが難しく、未来の展望が見えないため、帰還する人は少なくなる可能性が高い。常磐線は2015年6月に、富岡駅の手前の龍田駅まで開通し、いわき駅から上下9本の列車が運行されるようになった。しかし、沿線にはまだ住民の姿は少ない。

仲原正治

の

まちある記



常磐線木戸駅近くに野積みされた除染した「廃棄物」はますます増えている。付近では家の解体工事が進んでいたが、住む人は少ない。
撮影：2015年12月5日



常磐線富岡駅は海が近く津波被害にあったため開通はまだまだ。駅舎が取り壊され、海側には多くの放射性廃棄物が積み重なっている。
撮影：2015年12月5日



磐越東線小川郷駅前では、急ピッチで「災害復興住宅建設」のための造成工事が進んでいる。
撮影：2015年12月6日

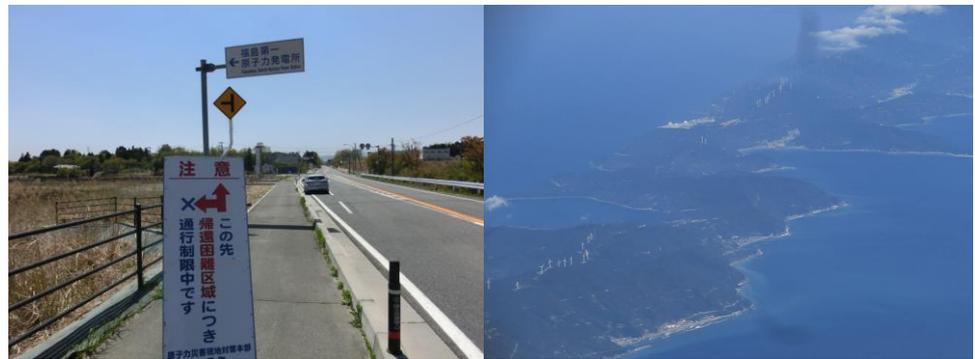


常磐高速道路の路肩に掲示されている放射線量計の値は現在でも毎時4.3マイクロシーベルトを示していた。
撮影：2015年12月5日

高齢者は、自分の慣れ親しんだ場所を離れ、死ぬまで違和感を持ちながら他地域で住むことを余儀なくされる。若者は町には戻らずに他都市に住居を定めて就職し、墓参りに戻るくらいだ。また、働き場所がなく補償金で暮らしている人も多い。いわき市内では、被災地の住民が新しい住宅を建設することや、災害復興住宅の建設などで地価が上がっている。付近の住民にとっては、新しい住民が引っ越してきて、彼らとの新しいコミュニティを形成していくことに一抹の不安を感じている。

こうした、地域を死滅させる「原子力発電所」を政府は再稼働することに決め、鹿児島県の川内原発は稼働を開始し、四国の伊方原発なども稼働に向けて動き始めている。技術の進歩は、人間に様々な恩恵を与えてきた。しかし、世の中に「絶対」のものは存在しない。絶対に安全だからという言葉は嘘だ。原発も老朽化すれば廃炉を余儀なくされ、放射性廃棄物は日本中に保管され、それを解消する技術は開発されていない。原発による電力は安価だという電力会社の発言も、廃炉費用や廃棄物処理費などを考慮に入れると嘘だと言わざるを得ない。

日本は、これまで、困難だと思われた自動車の排気ガス規制を技術力で克服した。原発に頼らないクリーンなエネルギーの開発のために様々な技術力を駆使して電力を作りだすことを進めれば、地球環境にも貢献でき、それが新しい産業も生み出すのではないだろうか。



左：国道6号線から福島第一原子力発電所に入る道路は一般車両の通行が禁止されている。国道6号線は駐車も禁止されていて、自動車から降りて撮影していたら警察官に注意された。（撮影：2015年4月26日）

右：大分空港から羽田空港へ向かう飛行機からは佐多岬が見える。多くの風力発電所に囲まれて伊方原子力発電所を見ることができる。（撮影：2015年9月28日）

三陸地方で感じたまちづくりの難しさ

三陸地方の津波によるダメージは、まちのあり方を根本的に変えている。海岸線地帯はほとんどすべての地域でかさ上げされて、まったく今までとは異なる「まち」を作ろうとしている。海岸線地域は、漁業の基地などには活用されるが、その背景

仲原正治

の

まちある記

となる生活の場は、すべて高台に移転をするという考え方で、まちづくりが進んでいる。



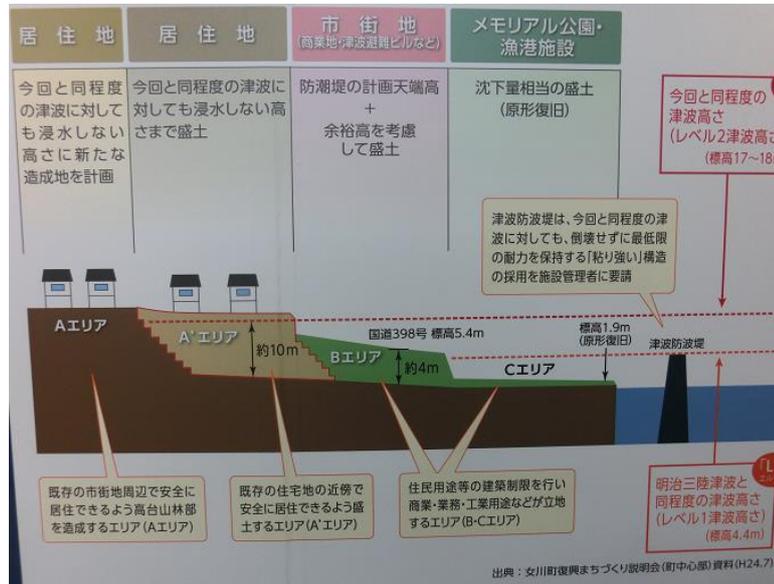
地盤がかさ上げされた女川駅前。新築された女川駅（坂茂設計）から海方向を望む
撮影：2015年6月28日



岩手県大槌町の中心市街地は、1年半前には造成が行われていなかった。写真の左にあるのが旧町役場
撮影：2014年6月22日



現在の大槌町の中心市街地は地盤のかさ上げ工事が急ピッチで進んでいる。震災遺構の旧町役場も壊される予定だ。(2017年現在は、まだN凝っている)
写真：中尾祐次
撮影：2015年12月1日



居住地や漁港施設等を分離した女川町復興まちづくり説明資料（撮影：2015年1月26日）

これを是とする人、否という人、価値観の違いは、様々な軋轢を生んでいる。こうしたまちづくりの良し悪しは、今、判断することは難しい。20~30年くらい経過し、次の世代にバトンタッチする時や再度、突発的な災害が生じた時に、良かったとかやっぱり違うということになるのだろう。

まちづくりを進めるには、様々な困難や障害が立ちふさがる。その困難や障害は、お金だったり、制度だったり、感情だったり、様々な要素が内在する。その結果、積極的に賛成や反対する人、消極的に意志を表す人、まったくの無関心な人、となって表れる。

こうした障害を克服していくためには、住民を説得できる計画の作成とリーダーの強い意志、住民をはじめとする多くの人たちの智慧、そして、それに基づいた積極的な行動をたゆまなく行っていくことが必要だ。

自分が反対していることでも、きちんとしたプロセスでまちづくりが進めば納得せざるを得ない。そして、そのプロセスこそが非常に重要になってくる。上からの押し付けでまちづくりを行うのではなく、住民が自らの意思で自分の生活の場を作っていく。結論も大切だが、そのプロセスによって人と人とのコミュニケーションが豊かになり、まちの基盤ができていく。今回、安全第一を掲げて「かさ上げ」をほとんどの自治体は選択しているが、その過程でどれだけ住民本位のプロセスがあったかは難しい問題だ。

原子力発電所の再稼働についても同じことが言える。福島県の大部分の人たちは、原発の再稼働に積極的に反対だが、原発被害を直接は受けなかった地域の人たちは、消極的な賛否になってしまう。本来ならば、自分の近くに原発がある地域では積極的に発言すべきだが、国の原発対策で経済的に潤うこともあり、雇用などを考え、知事や市長は賛成を表明することが多い。経済性ばかりの追求で、住民の感情の障害を金銭で置き換えて賛成させていくような方法を国はとっている。ここには、稼働までの住民意思を確かめていくプロセスはまったく無視されている。

しかし、政府の経済性追求の手法は沖縄では通用していない。沖縄の基地問題を考えると、遠くの東京・大阪などの都市では消極的な意見や無関心層が多い。しかし、沖縄では金銭では補えない 70 年間という長い年月を基地問題で悩まされているため、感情的な障害が強く、いくら国が「アメ」を振りかざしても納得しない。そのため、裁判というムチを振りかざすが、こうした「アメとムチ」の策をとる国のプロセスは褒められたものではない。

以前、取材で仙北市を訪ねた時、観光協会の安藤会長が「仙北市は震災や放射能の被害はほとんどなかった。岩手や宮城、隣で苦しんでいる人がいるのに、自分のところは大丈夫だから来てくださいと言うような観光客の誘致は、東北人にはできない」と東北人の矜持を語ってくれたことが心に響く。お互いを思いやり、お互いの地域と一緒に成長して発展していく姿、それこそが本来の地方のあり方で、政府が「カネ」という武器で地方を蹂躪する姿は、情けないと同時に怒りを覚える。

「まちある記」 あとがき

日本では経済は行き詰まりが見えはじめ、生活に楽しみが少ない、日々の暮らしも大変だが、それ以上に将来が見えず閉塞感が漂っている。失業率は 3.5%前後、非正規雇用者は約 40%で、非正規雇用者の多くは、生活の保障がないため、いつもビクビクして暮らすことになる。仕事が見つからない、明日クビになるかもしれない。こうした環境にいるのは、若年層だけではなく、壮年も高齢者も同じ環境にさらされている。高齢化率は 25%を超え、4 人に 1 人は 65 歳以上で、ますますその率は高まっている。年金をもらって悠々自適な生活ができる人間は限られている。生活保護費も年々増加している。

国の予算では医療費と社会保障費が伸び、借金がかさみ、未来志向の費用は縮小されている。50 年、100 年後の日本を作っていく準備ができない。自分の存在が社会では必要のないものと思い、自殺する人も年間 3 万人近くにのぼっている。こうした状況下で、私たち市井のものは何を楽しみに生きていくのだろうか。

「楽しいことって何？」と若者に尋ねると、明確な回答が返ってこない。「じゃ、

仲原正治

の

まちある記



月に1回程度、いわき市にある家で野菜づくりをして、非日常を楽しんでいる筆者
撮影：2015年9月6日



上海で撮影した「幸福公社」の看板。みなさまが幸福でありますように。
撮影：2010年3月8日

何にお金を使っているの」と聞くと、「携帯、音楽、映画・・・デート」という答えだ。同じことを60代に尋ねると、「旅行、美味しいもの・・・趣味」という答えが返ってくる。毎日の仕事や家事、家庭での生活はあまり楽しいものではないようで、日常生活からちょっと離れたことにお金を使い、楽しみを感じているのではないだろうか。

私たちは日常と非日常の間をさまよっている。仕事や家事という日常に追いまわられる中で、ふっと心地よい非日常に触れることが、楽しみでもあり日常の中のストレスを解消する方法かもしれない。私が「まちある記」を連載してきた目的のひとつは、こうした非日常的な空間、楽しい時間を少しでも皆さんに味わっていただきたいためだ。旅行だけではなく、自分の町を散歩するときに、ちょっとした非日常を見つけることで、新しい発見が生まれ、生きることが楽しくなってくる。そんな些細な幸せを少しでもお裾分けできたらと思う。

私は、まち歩きが大好きだ。現在は両親の介護で思うようには出かけられないが、それでも月に1回はいろいろな町を訪ね、いろいろな人に会い、時には鄙びた温泉宿にとまり、時にはその土地の日本酒と一緒に新鮮な肴に舌鼓する。四季の移り変わりのある素晴らしい日本で、その土地の魅力を探し、人と話し、歴史、風土、人柄など、自分の町との相違点を考え、楽しい時間を過ごす。特に、町の達人に出会うと、新しい発見があり嬉しくなる。そうした人たちとの繋がりを大切にして、様々なヒントをもらい、それを、自分の住んでいる町に活かす。そうした積み重ねで、楽しい人生を送ってきた。

「あなたは、誰のためにするのか。」と問われたときに、「人のためというよりも自分のためにするのだ」と確信を持っている。そして自分の行動が、自分のためであり、それがひとつでも家族や周りのためになり、ひいては社会のためになる。そんな生き方ができれば最高だ。私はそういう人生の達人になりたい。

約5年にわたり読んでいただいた読者のみなさま、拙い文章を校正していただいた編集者の方々に感謝申し上げます。

では、みなさん、またどこかの「まち」でお会いしましょう。

「携帯を封印せよ、さあ、町へ出よ。そして楽しく豊かな時間を過ごそう。」

仲原正治

の

まちある記

著者：仲原正治

発行：2018年1月

「仲原正治のまちある記」は日経BP社「ケンプラッツ」の記事を加筆・訂正したものです。この文章及び写真（提供写真を除く）については、出典さえ明らかにしていただければ「著作権フリー」です。

仲原正治（なかはら まさはる）略歴

(株)MZarts クリエイティブ・ディレクター(陶磁器・現代アートギャラリー)

1949年東京生まれ。1974年東北大学法学部卒業。

文化芸術によるまちづくり及びクリエイティブシティ政策の専門家。

2011年4月から2015年12月まで、日経BP社の総合サイト「ケンプラッツ」に「まちある記」を連載。全国の中心市街地、東日本大震災の被災地のレポートなど、特徴あるまちづくりを紹介している。

主な著書：「横浜市創造都市事業本部 2586日の戦い」（インターネット出版）。

現在、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター理事(事務局次長)、赤煉瓦ネットワーク通信員。